朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制

吉井秀夫

【要約】本稿は、六・七世紀の百済の中心地であった朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制の変遷を検討し、そこから当該地域の歴史的変遷を考察することを目的とする。まず、古墳に副葬された土器と百済王陵の埋葬主体の編年案を提示し、それをもとに三期にわたる墓制の変遷を検討した。錦江Ⅰ期には、竪穴式石室を埋葬主体とし広口長頸壺・高杯形器台などを副葬する独自の墓制が存在していたが、錦江Ⅱ期には、種々の横穴式石室を埋葬主体とし、杯・三足杯などを副葬した新たな墓制が出現し、竪穴系の石室のような以前の墓制の要素は断片的に残るのみとなる。そして、錦江Ⅲ期になると、王陵と同系の平斜天井石室が普及する。こうした墓制の変遷は、全羅道などの他地域でもうかがわれ、それは、独自の墓制を有していた錦江下流域の地域共同体が、熊津遷都を契機として移動してきた百済中央勢力に階層的に組み込まれ、その後さらに画一的な地方支配の下に組み込まれていくという、百済中央勢力の地方支配のあり方の変化を反映していると考えられる。

史林　七四巻一号　一九九一年一月

一　はじめに

朝鮮半島の西南部にあたる、京畿道・忠清道・全羅道のいわゆる百済地域[1]における三国時代の考古学的調査・研究は、慶尚道の新羅・伽耶地域のそれにくらべて、これまで決して進んでいるとはいえなかった。しかし、一九八〇年代に本格化した、ソウル特別市夢村土城・石村洞古墳群や、全羅南道栄山江流域の大型甕棺墓の調査の進展は、当該地域の考古学的研究にとって大きな成果をもたらしたとともに、多くの問題点を提出したように思われる。特に、栄山江流域で大型甕棺墓という独自の墓制の存在が明らかにされたこと[2]で、いわゆる百済地域を、百済領域と同一視して研究を進める立場は、

再考を迫られているといえよう。百済地域は、漢江・錦江・栄山江などの河川を基準としていくつかの地理的に区分できる小地域の設定が可能であり、それらの小地域ごとに三国時代の考古資料の変遷を検討し、その上で、小地域間の関係、特に百済の中央勢力[3]との関係を検討していく視点が、必要なのではなかろうか。

本稿で対象とする錦江下流域は、現在の行政区画でいえば忠清南道の南部と全羅北道の北部の一部にあたり、熊津（公州）・泗沘（扶余）という百済の中・後期の王都が存在した、六・七世紀の百済の中心地となった地域である（図1）。この地域の古墳研究は、百済地域の中では、解放前でも比較的調査が進められた地域であり、その概要は梅原末治氏によりまとめられている。[4] 解放後は、安承周氏や姜仁求氏により、横穴式石室の構造を中心とする検討が進められ、[5] さらに安氏は甕棺墓[6]・土壙墓[7]・竪穴式石槨墓[8]、姜氏は火葬墓[9]の検討を行なって、百済の多様な墓制の様相を明らかにしてきた。特に安氏は、甕棺墓・土壙墓・竪穴式石槨墓の被葬者を土着集団の有力者とみなして、横穴式石室の被葬者との系統の違いを想定した点[10]が注目される。一方、尹武炳氏が、公州と扶余に隣接する論山郡東部の連山地域の古墳出土土器を検討して、杯・三足杯・短頸壺・瓶を主体とする典型的な百済土器に先行すると考えられる、高杯形器台・卵形胴体の壺（広口長頸壺）・把手付鉢を主体とする土器群の存在を指摘した[11]ことは、錦江下流域の在地墓制とその造墓集団を考える上で重要な研究である。本稿は、こうした先行研究と最近の発掘調査の成果を受け、古墳に副葬された土器の器種構成や埋葬主体などによって特徴づけられる、錦江下流域の三国時代の墓制の特色とその変遷を検討し、この地域における在地勢力と百済中央勢力の関係のあり方に着目しつつ、この地域の三国時代の歴史的変遷を考察することを目的とする。具体的な検討手段としては、まず最初に、この地域の古墳出土土器と百済王陵の埋葬主体の編年案を提示し、墓制の変遷を検討していく上で必要な時間軸を設定する。その上で、時期ごとに、空間的・階層的なあり方に注意しつつ、錦江下流域でみられる墓制のあり方を、埋葬主体と副葬土器の様相を中心として整理する。そして、そこから各時期の錦江下流域の社会的・政治的様相を考察していくこととしたい。

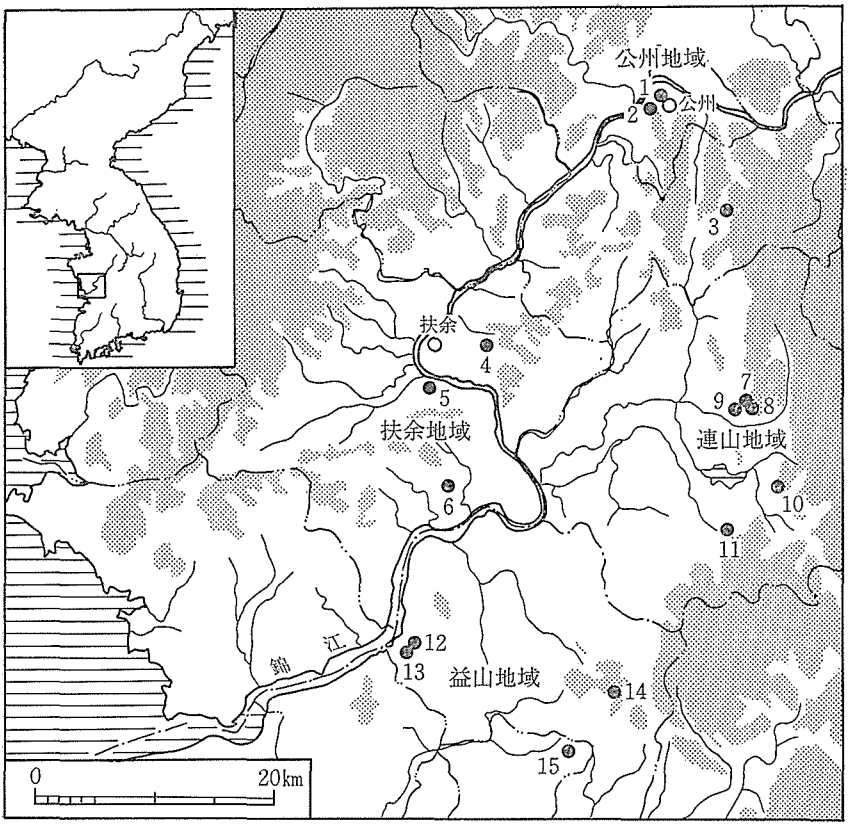

図1　錦江下流域の主要遺跡分布図（梨地は標高100m 以上）

1　宋山里古墳群　2　熊津洞古墳群　3　中壮里古墳　4　陵山里古墳群
5　亭岩里古墳群　6　豆谷里古墳群　7　表井里古墳群1979年調査区
8　表井里古墳群1981年調査区　9　表井里古墳群1985年調査区
10　新興里古墳群　11　六谷里古墳群　12　熊浦里古墳群　13　笠店里古墳群
14　新龍里窯址　15　益山双陵（大王墓，小王墓）

なお、議論を進める便宜上、対象地域である錦江下流域を、遺跡の分布状況などにより、宋山里古墳群⑫・熊津洞古墳群⑬などのある公州市周辺の公州地域、陵山里古墳群⑭をはじめとして多くの古墳が知られる扶余邑周辺の扶余地域、表井里古墳群⑮・六谷里古墳群⑯などがある論山郡東半の連山地域、熊浦里古墳群⑰・笠店里古墳群⑱や益山双陵⑲を含む益山地域に区分する。そして、検討資料としては、主にこの四地域の古墳を対象とし、必要に応じて周辺地域の出土資料も使

用することとする。

① 本稿でいう「百済地域」は、領域としての百済の範囲ではなく、京畿道・忠清道・全羅道をあわせた地域名として用いることとする。

② 成洛俊「栄山江流域의甕棺墓研究」(『百済文化』第一五輯、一九八三年。翻訳としては武末純一訳「栄山江流域の甕棺墓研究」(『古文化談叢』第一三集、一九八四年)、徐聖恂「栄山江流域甕棺墓의一考察」(『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢』I考古学篇、一九八七年)、崔夢龍「考古学的側面에서본馬韓」(『馬韓・百済文化』第九輯、一九八六年)など。

③ 原則として王都周辺に本拠を持つ、王・王族を中心とした、百済の政権の中核に位置する勢力を「百済中央勢力」と呼ぶこととする。

④ 梅原末治『朝鮮古代の墓制』一九四七年、六二～七九頁。

⑤ 安承周「百済古墳의研究―公州地方을中心으로」(『百済文化』第二輯、一九六八年、翻訳としては西谷正訳「公州地方の百済古墳」(『考古学ジャーナル』五八・五九号、一九七一年)、同「百済古墳의研究」(『百済文化』第七・八合輯、一九七五年)、安承周・全栄来「百済石室墳의研究」(『韓国考古学報』一〇・一一、一九八一年)、姜仁求『百済古墳研究』一九七七年、翻訳としては岡内三眞訳『百済古墳研究』一九八四年。

⑥ 安承周「百済甕棺墓에관한研究」(『百済文化』第一五輯、一九八三年)。

⑦ 安承周「百済土壙墓의研究」(『百済文化』第一六輯、一九八五年)。

⑧ 安承周「百済竪穴式石槨墓의研究」(『韓国考古学報』二二、一九八九年)。

⑨ 姜仁求注⑤前掲文献。

⑩ 安承周注⑧前掲文献、七〇頁など。

⑪ 尹武炳「連山地方百済土器의研究」(『百済研究』第一〇輯、一九七九年)。

⑫ 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」(一)～(八)(『考古学雑誌』第二三巻第七号～第二六巻第四号、一九三三～一九三六年)、野守健・神田惣蔵『忠清南道公州宋山里古墳調査報告』(『昭和二年度古蹟調査報告』第二冊、一九三五年)、文化財管理局『武寧王陵』一九七三年、尹根一「公州宋山里古墳発掘調査概報」(『文化財』第二一号、一九八八年)。

⑬ 安承周『公州熊津洞古墳群発掘調査報告書』(『百済文化』第十四輯、一九八一年)、李南奭「百済時代石築墓의一考察―88년公州熊津洞調査古墳―」(『百済文化』第一八・一九合輯、一九八九年)。

⑭ 稲田義助「朝鮮扶余に於ける百済の墳墓」(『考古学雑誌』第四巻第九号、一九一四年)、関野貞「百済の遺跡」(『考古学雑誌』第六巻第三号、一九一五年)、朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第三冊、一九一六年、野茂健・小川敬吉・谷井済一「京畿道廣州・楊州・忠清南道天安・公州・扶余・青陽・論山・全羅北道益山及全羅南道羅州十郡古蹟調査略報告」(『大正六年度古蹟調査報告』一九二〇年)、梅原末治「扶余陵山里東古墳群の調査」(『昭和十二年度古蹟調査報告』一九二〇年)、洪思俊「陵山里新古墳」(『考古美術』七―四、一九六六年)、有光教一「扶余陵山里伝百済王陵・益山双陵」(『橿原考古学研究所論集』第四、一九七九年)。

⑮ 安承周「論山表井里百済古墳과土器」(『百済文化』第九輯、一九七六年)、尹武炳注⑪前掲文献、徐聖恂・申光燮「表井里百済廃古墳調査」(『中島』V(『国立博物館古蹟調査報告』第一六冊)、一九八四年)、安承周・李南奭『論山表井里百済古墳発掘調査報告書―一九八五年度

発掘調査―』、一九八八年。

⑯ 姜仁求「論山六谷里의百済古墳과遺物」（『考古美術』一二一・一二二、一九七四年）、安承周・李南奭『論山六谷里百済古墳発掘調査報告書―一九八六年度発掘調査―』、一九八八年。

⑰ 金三龍・金善基『益山熊浦里百済古墳群発掘調査報告書』、一九八八年。

⑱ 文化財研究所『益山笠店里古墳発掘調査報告書』、一九八九年。

⑲ 野守健ほか注⑭前掲文献、有光教一注⑭前掲文献。

二　古墳副葬土器・百済王陵の埋葬主体の編年

錦江下流域の三国時代墓制の変遷を検討する前提作業として、本章では、古墳の主要な出土遺物である土器と、埋葬主体の中で比較的変遷が明らかで、他の古墳の埋葬主体の年代を考える上での指標となり得る百済王陵の埋葬主体の編年案を提示する。本稿は編年自体が目的ではないので、本稿の議論に必要な程度の概略を示すこととし、詳細な検討は将来に期したい。

1　古墳副葬土器の編年

錦江下流域を中心とするいわゆる百済土器の編年は、藤沢一夫氏の研究①をはじめとし、これまで、安承周②・尹武炳③・全栄来④・小田富士雄⑤氏らにより検討がなされてきた。そうした研究のなかで、杯・三足杯・短頸壺・瓶といった典型的な百済土器の変遷の方向は示されてきている。また、先述のように、尹武炳氏は、連山地域の古墳出土資料の検討をもとに、典型的な百済土器の器種の組み合せ（表井里土器群）に先行する土器群として、広口長頸壺・高杯形器台・把手付鉢などからなる新興里土器群の存在を指摘した。この想定は、その後の調査の成果をみても支持できるものである。こうした先学の成果をもとに、最近の発掘資料を加えて、古墳に副葬された土器の変遷を検討してみることとしたい。

まず、主要器種の型式分類を行なう。新興里土器群のうちでは、広口長頸壺と高杯形器台について、型式学的な変化を想定することができる。口頸部が胴部径とほぼ同じかそれ以上に広がり、外面にタタキを残さない長卵形の胴部を持つ広

口長頸壺は、口縁部端の形態と頸部の加飾により、以下のように分類する。

Ⅰ類：口縁端が肥厚せず、頸部に加飾がないか、突帯を一条程度巡らす（図2―1・2）。

Ⅱ類：口縁下端が肥厚し、頸部は加飾がないか、一～二条程度の突帯を巡らす（図3―1）。

Ⅲ類：口縁下端が肥厚し、頸部は突帯が多条化したり、突帯の間や肩部に単線波状文・複線波状文・竹管文・列点による羽状文や籠目状の文様が施される（図4―5）。

高杯形器台は、器高二〇㎝をこえ、杯部の口縁が外反して終わる大型のもの（A類）と、器高二〇㎝以下で杯部口縁が外反しない小型のもの（B類）に大別できる。さらに、A類は、杯部の形状や外側部に巡らされる突帯の本数により、以下のように分類する。

Ⅰ類：杯部口縁は外折して水平に近く大きく広がり、外側部に一条の突帯を巡らす（図2―5）。

Ⅱ類：杯部はⅠ類より深みを増し、口縁は外反して斜め上方に伸び、外側部に1～2条の突帯を巡らす（図3―5）。

Ⅲ類：杯部は深く、口縁は短く外反して終わり、外側部は、突帯が多条化したり、突帯間を複線波状文などで加飾する（図4―6）。

出土状況から、高杯形器台A類は、広口長頸壺をのせる器台であったことがわかる。そして、両者とも、突帯の多条化や加飾の増加といった点において、Ⅰ類からⅢ類への変遷が想定される。この変遷に合わせて、高杯形器台の脚部も、透孔の段数が増えたり突帯が多条化し、杯部高に対して脚部高が相対的に小さくなる傾向にあるようである。広口長頸壺は口縁部の開き具合いなどにおいて、高杯形器台A類は脚部の透孔や突帯のあり方によって、いくつかの系統が指摘できそうであるが、その具体的な検討は今後の資料の増加を待つこととする。

次に典型的な百済土器とされてきた器種のうち、三足杯と杯は、たちあがりの外側に丸い肩部を形成して受け部とするもの（A類）と、日本の蓋杯と同様の鍔状の受け部をもつもの（B類）に大別できる。三足杯には、口径が一五㎝前後と大

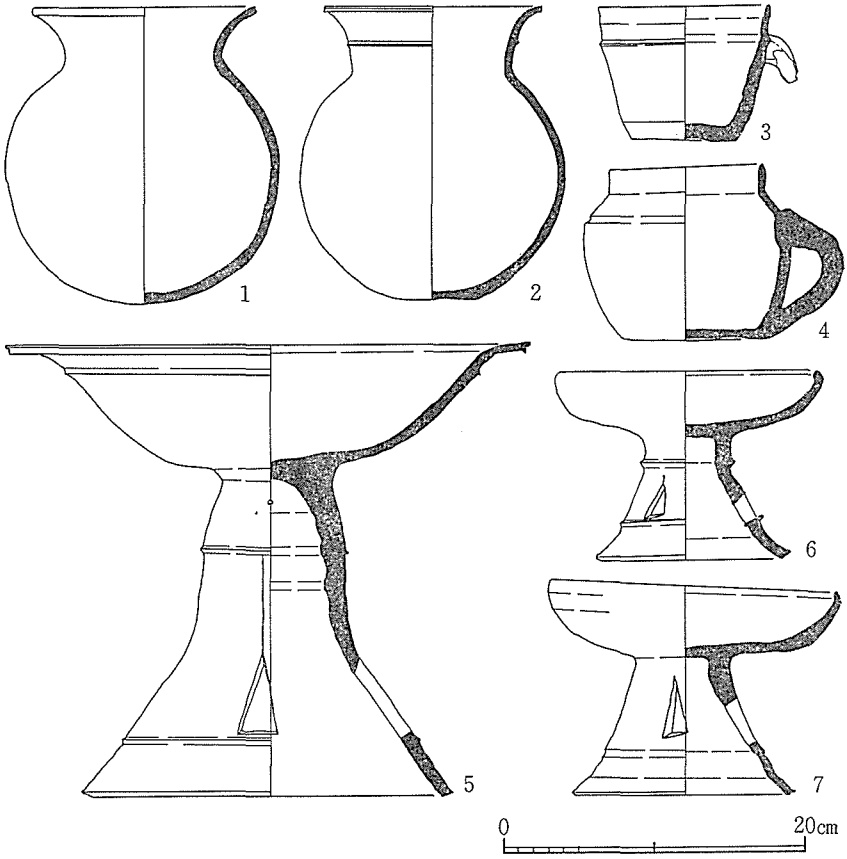

図２　錦江Ⅰａ段階の土器（縮尺５分１）
１　表井里85―３号墳　２　表井里85―８号墳　３・４　新興里１号墳　５～７　新興里２号墳

きく、底部が深くて丸く、たちあがりが短い形態のもの（Ｃ類、図３―４）もある。三足杯・杯Ｂ類は、さらに全体の形状から、底部に深みがありたちあがりも高いＢⅠ類、ＢⅠ類にくらべ底部が深みを失うＢⅡ類、底部はほぼ扁平化するがたちあがりが長いＢⅢ類、底部が扁平化してたちあがりも短いＢⅣ類に細分できる。これまで指摘されてきたように⑥、杯・三足杯は扁平化の方向、つまりＢⅠ類からＢⅣ類への変遷を認めてよいだろう。資料が少なく現状では細分を保留するが、三足杯・杯Ａ類も同様の変化をするようである。

また、短頸壺と瓶は、外面の最終調整や加飾の状況でバラエティがあるが、基本的にはすでに指摘されてきたように、[7]最大胴径が中央近くにある球形の胴部をもつものから、最大胴径が上方にあるものへと変化すると考える。

以上の型式分類をもとに、古墳に副葬された土器の共伴関係を検討すると、大まかに、新興里土器群が主体を占める段階、底部に深みをもつ三足杯・杯（BⅠ・Ⅱ類）が主体的に存在する段階、底部が扁平化した三足杯・杯（BⅢ・Ⅳ類）が主体的に存在する段階に大別できる。これらをそれぞれ錦江Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ段階とする。その概要は以下の通りである。

錦江Ⅰ段階　新興里土器群が主体を占める段階で、現状では連山地域のみで認められる。広口長頸壺Ⅰ類・高杯形器台AⅠ類が主体を占める段階（Ⅰa段階）と、広口長頸壺Ⅱ類・高杯形器台AⅡ類が主体を占める段階（Ⅰb段階）に細分する。

Ⅰa段階（図2）は、論山郡陽村面新興里1・2号墳[8]出土土器を標式とする。主な共伴器種としては、高杯形器台B類・把手付鉢があげられる。この段階の高杯形器台B類（6・7）は、杯部は内彎気味に斜め上方に伸び、口縁端はそのまま丸くするか、短く内折して端部を丸めて終わり、脚部はやや開き気味ながら直線的に伸び、三角形や小円形の透かしをあける。把手付鉢は、現状ではこの段階でのみ認められ、杯部にはコップ形のもの（3）と、内傾して肩部をなしたのち直立した口縁部に続くもの（4）があり、把手にも、半環状のもの（4）と角状のもの（3）があり、バラエティに富む。

Ⅰb段階（図3）は、論山郡連山面表井里八五―一四[9]・一五・一六号墳[10]出土土器を標式とする。主な共伴器種としては、高杯形器台B類・脚付短頸壺など新興里土器群に属するものが主体だが、有蓋高杯や三足杯C類が共伴する例がある。表井里八五―一六号墳出土の高杯形器台B類（7）は、杯部が直線的に広がり、口縁端部は下方に肥厚し、脚部は裾部がややひろがり、小円形の透かしがあけられる。脚付短頸壺は、表採品は多く知られるが、発掘例では表井里八五―一四号墳出土の脚部を欠いたもの（6）があるのみである。本例は、胴部半ばに突帯を巡らし、口縁部は短く開く。表井里八五―一五号墳出土の有蓋高杯（2）は杯部が浅くてたちあがりは短く、脚部は直線的に広がり、小円形の透かしをあける。表井里八五―一四号墳出土の三足杯C類（4）は、発掘例ではこの段階でのみ確認されるもので、[11]漢江下流域の夢村土城で類例が多

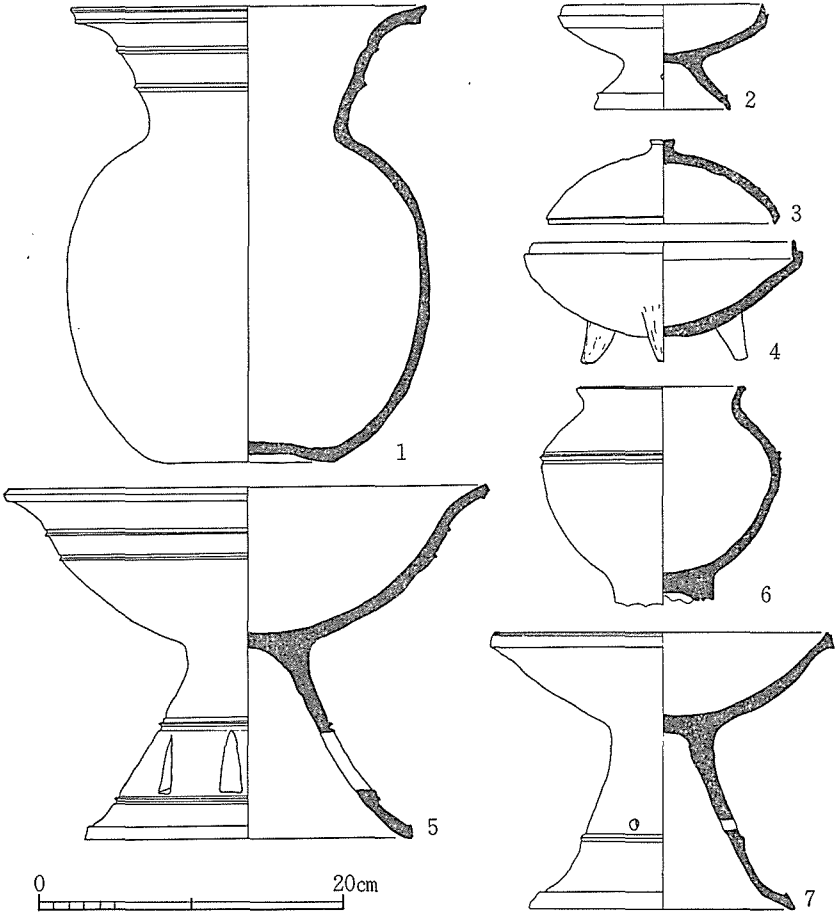

図3　錦江Ⅰb段階の土器（縮尺5分1）
1・5〜7　表井里85—16号墳　　2　表井里85—15号墳　　3・4　表井里85—14号墳

く知られるものである。[12]セットになる蓋(3)は、天井部が丸みを帯びて短く垂下する口縁がつき、天井部には穿孔された円柱状のつまみがつくもので、夢村土城[13]や表井里八五—一六号墳に類例がある。

錦江Ⅱ段階　いわゆる典型的な百済土器のうちでも、底部が深みをもつ三足杯・杯が主体を占める段階であり、錦江下流域一帯で類例が見いだされるようになる。杯BⅠ類が主体をなす段階（Ⅱa段階）、三足杯BⅠ類・杯BⅡ類が主体をなす段

階（Ⅱb段階）、三足杯BⅡ類が主体をなす段階（Ⅱc段階）に細分する。

Ⅱa段階（図4—1～9）は、表井里八一—二・三・五・六号墳[14]、益山郡熊浦面熊浦里二〇号墳[15]出土土器を標式とする。主な共伴器種としては、短頸壺・筒形器台がある。短頸壺は、胴部が球形のもの、扁平形のもの（9）、胴部中央部が張るもの（7）があり、上半部を中心として突線や単線波状文を巡らしたり、胴部最大径の部分に沈線を一条巡らす例がある。筒形器台（8）は表井里八一—二号墳で出土している。徐聲勲氏のB型器台[16]に当たり、突帯と沈線を巡らしてその間に羽状列点文が施されるのが特徴である。三足杯は明確な共伴例に欠けるが、表井里八一—六号墳出土例（4）などをみると、BⅠ類の中でも底部に深みがあり、口縁内面に段をもつ、より古相を示すものがこの段階に存在するようである。また、この段階の連山地域では、新興里土器群に属する広口長頸壺Ⅲ類（5）・高杯形器台AⅢ類（6）が共伴する例がある。突帯や、単線・複線波状文、竹管文、列点を用いた装飾文様など加飾が著しいのが特徴である。こうした加飾は短頸壺・筒形器台・広口長頸壺・高杯形器台に共通してみられ、この段階の器種をこえた特徴とみなせる。

Ⅱb段階（図4—10～17）は、表井里七九—一三号墳[17]、熊浦里二号墳出土土器が標式である。また益山郡金馬面新龍里一・二号窯跡[18]出土土器の多くもほぼ同段階に当てられる。主な共伴器種としては、杯A類（11）・三足杯A類・短頸壺（17）・瓶（16）がある。短頸壺・瓶はいずれも胴部が球状のものが主体を占める。また、熊浦里二号墳や新龍里一・二号窯跡では、有蓋高杯（13）の存在が知られる。これは第Ⅱ段階でみられたものとは異なり、杯BⅡ類に脚をつけた形態で、夢村土城に類例を見いだせるほか[19]、連山地域などでも表採例がある[20]。

Ⅱc段階（図5—1～6）は、表井里七九—二・四・八・一二号墳がこの段階に当てられると考えられるが、今のところ良好な資料に欠ける。共伴器種としては、杯BⅡ・Ⅲ類や、胴部が球状の短頸壺（6）・瓶（5）などが想定される。

錦江Ⅲ段階　底部が扁平な三足杯・杯が主体をなす段階である。三足杯・杯BⅢ類が主体をなす段階（Ⅲa段階）と、三足杯・杯BⅣ類が主体をなす段階（Ⅲb段階）に細分する。

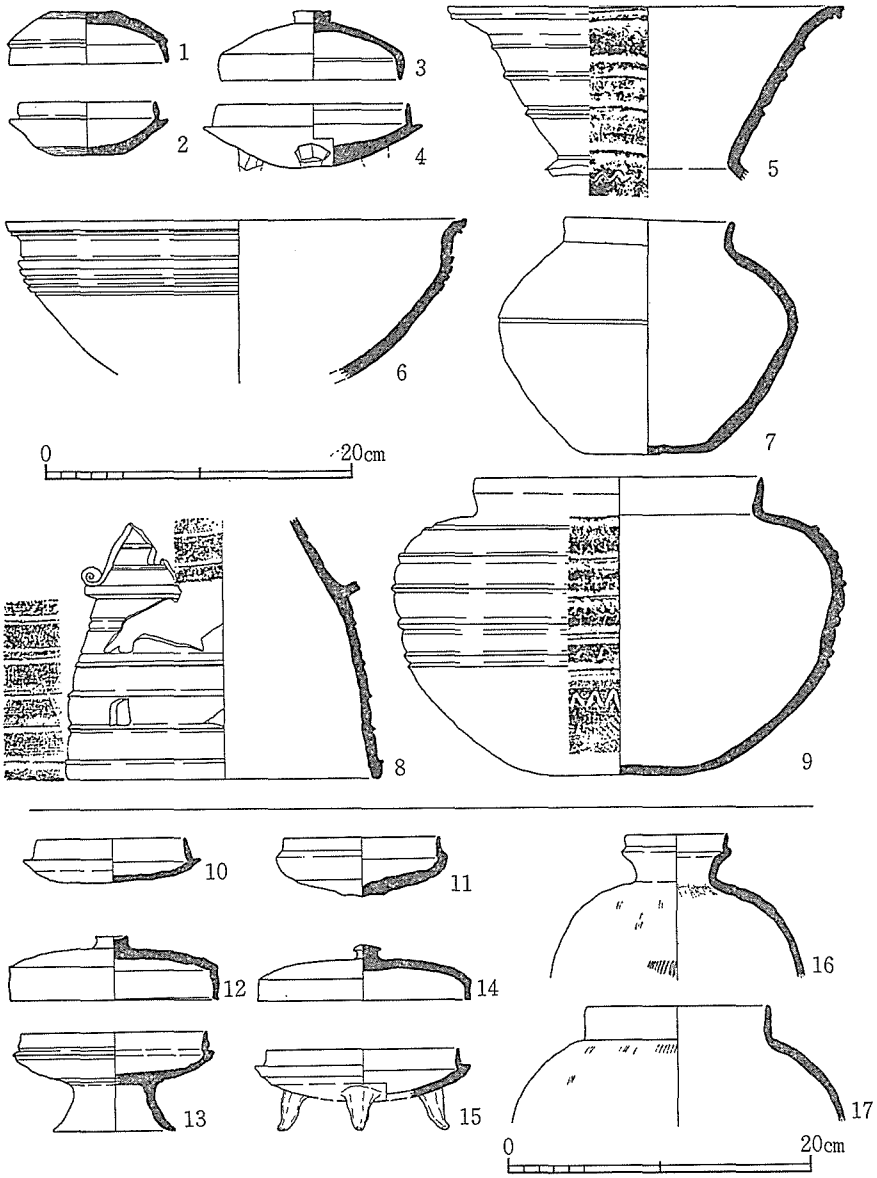

図4　錦江Ⅱa（上）・Ⅱb（下）段階の土器（縮尺5分の1）
1・2　表井里81—3号墳　　3・7　熊浦里20号墳　4・6　表井里81—6号墳
5・8・9　表井里81—2号墳　　12・13・17　新龍里1号窯　　10・11・14～16　新龍里2号窯

Ⅲa段階（図5―7～13）は、保寧郡熊川面九龍里古墳[21]、公州郡鶏龍面中壮里古墳[22]出土土器を標式とする。高敞郡雅山面雲谷里窯跡[23]出土土器もこの段階にあてられる。主な共伴器種としては、短頸壺（13）・瓶（11）があげられる。いずれも、この段階になると、胴部の最大径が上半に移り、肩が張ったものが主体をなすようになる。

Ⅲb段階（図5―14～21）は、六谷里一九七三年調査古墳[24]、六谷里二号墳[25]、保寧郡青蘿面長峴里古墳[26]出土土器を標式とする。主な共伴器種としては、短頸壺（21）・瓶（19）があげられ、その基本的な形態は、前段階と変わらない。

2　百済王陵の埋葬主体の編年（図6）

漢城・熊津・泗沘と遷都を続けた百済の王ないし王族の墓は、各時代の王都の近辺にその存在が想定されてきた。漢城時代では、石村洞古墳群、ないし可楽洞・芳荑洞古墳群、熊津時代では宋山里古墳群、泗沘時代では陵山里古墳群がそれである。これらのうち、本稿の対象地域でない漢城時代のものは検討の対象からひとまずはずし、本稿の議論に必要な、宋山里・陵山里古墳群の動向についてのみ整理する。

宋山里・陵山里古墳群の諸古墳は、後述するように、埋葬主体の構造や構築技術・規模・副葬品の内容において、同時代の他の古墳より卓越しており、王ないし王族の墓と認め得る。その変遷の方向は、基本的には宋山里古墳群から陵山里古墳群への墓域の移動と考えてよく、また、埋葬主体の系統的な変遷案は、すでに姜仁求・東潮氏が提示している[27]。両者の検討を参考にしつつ、従来、分類や変遷の基準となってきた玄室の天井形態・平面プラン・壁面構築法や羨道長のほかに、石室の閉塞方法と種々の状況から推定できる被葬者数の変化に注意して、以下の四段階を設定する。

宋山里Ⅰ段階　宋山里一～四号墳が造られた段階。埋葬主体は、玄室平面が正方形に近く、割石で玄室の四壁を著しく持送る穹窿状天井の横穴式石室で壁面全体に漆喰が塗られる。床面は玉石敷で棺台はみられない。羨道は玄室からみて左に偏ってつき、羨道の閉塞は塊石による。玄室床面に残された釘・鐶座金具の出土位置から、主軸に沿って二人が鐶座金

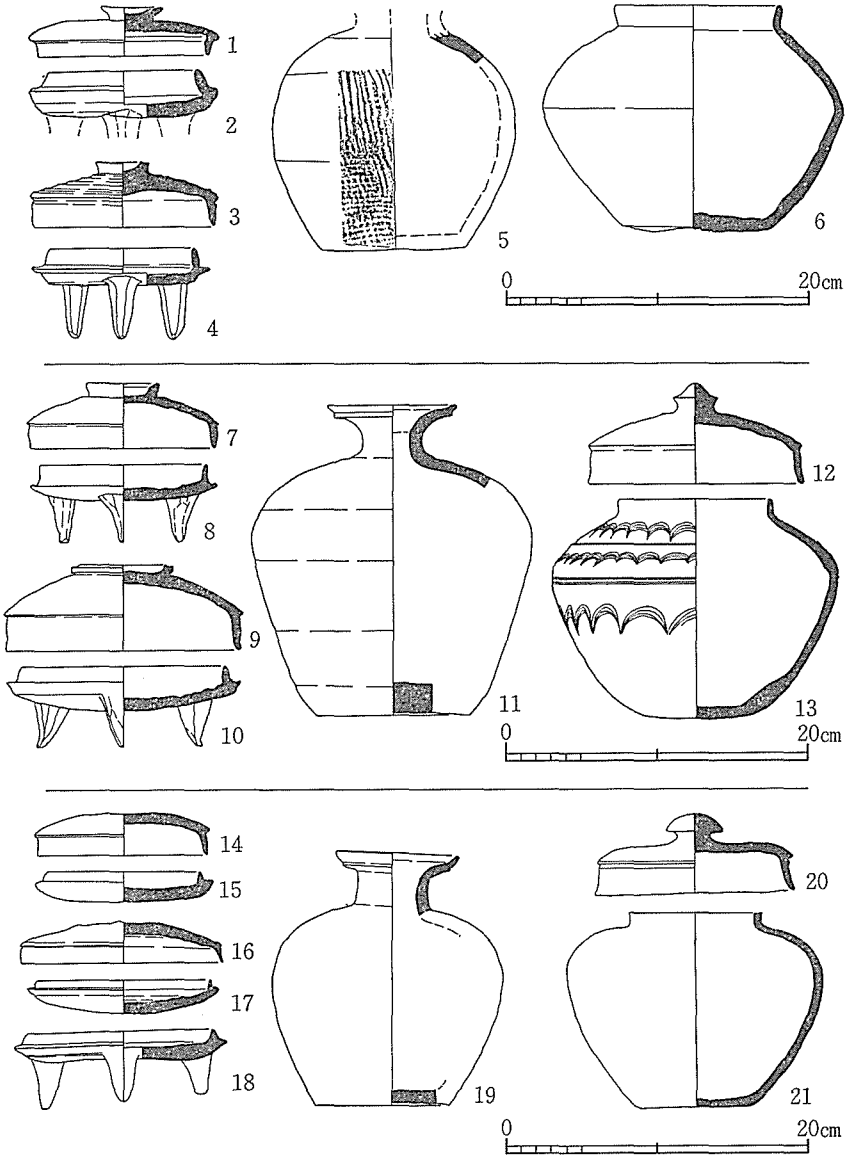

図5　錦江Ⅱc（上）・Ⅲa（中）・Ⅲb（下）段階の土器（縮尺5分の1）
1～4　表井里79—4号墳　5・6　表井里79—2号墳　7～13　九龍里古墳
14・15・20・21　六谷里2号墳　16・17・19　六谷里1973年調査墳　18　長峴里古墳

具がついた木棺で埋葬されたと推定される。

宋山里Ⅱ段階　宋山里五・六(3)・二九(2)号墳、武寧王陵が造られた段階。穹窿状天井石室が埋葬主体に採用され続ける一方、中国南朝の梁から技術導入されたと思われる塼室が出現する。塼室は玄室平面が長方形で、塼を用いて天井をアーチ状に構築する。玄室床面には棺台が造られ、その配置や武寧王陵での出土状況から、二人が木棺を用いて主軸方向に平行に埋葬されたことがわかる。羨道入口は塼を積み隙間を漆喰で埋めて閉塞し、武寧王陵ではさらに玄門を木の板で閉塞していた可能性がある。[26]

宋山里五・二九号墳で採用された穹窿状天井石室は基本的に前段階の形態を受け継ぐが、玄室の主軸に平行して塼で棺台が造られ、羨道の閉塞も塼と漆喰を用いて行なわれる。また、宋山里二九号墳では塼を模した板石で壁面を構築しており、これらの埋葬主体が、塼室の築造に並行して造られたことを示している。

陵山里Ⅰ段階　中下塚(4)、東下塚、陵山里東四号墳(5)をこの段階とする。中下塚は、トンネル天井石室で、これまで指摘されてきたように、[27]基本的に塼室の形態を模倣したと考える。壁面は、横長の切石を積み、四段目から内面を傾斜させることで、アーチ状の天井を築造している。この構造から、側壁を縦長の切石にし、アーチ天井部を直線的に斜めにしたものが、陵山里東四号墳であると考えられ、次の段階では、この平斜天井石室が盛んに使われることとなる。羨道部をみると、長さが二〇〇cm以上と長く、玄門両側の門柱石と楣石が内側に突出し、それらに板石を立てかけて閉塞する構造がこの段階に成立する。また、中下塚は羨道入口を塼状の石と漆喰で閉塞するのに対し、陵山里東四号墳では板石で閉塞する。東下塚は、切石造りの平天井石室であるが、羨道の長さや、玄門を板石、羨道入口を石を積み上げて閉塞する点、さらに塼を模した板石を玄室床面や羨道の一部に敷く点が中下塚と共通し、この段階のものと判断できる。

この段階は石室ごとに天井形態などで大きな差異がみられるが、それは塼室の切石による模倣にはじまり、平斜天井石室が成立するまでの過渡的段階と考えることができる。また、塼室の玄室平面を踏襲しながら全体の規模が縮小した結果、

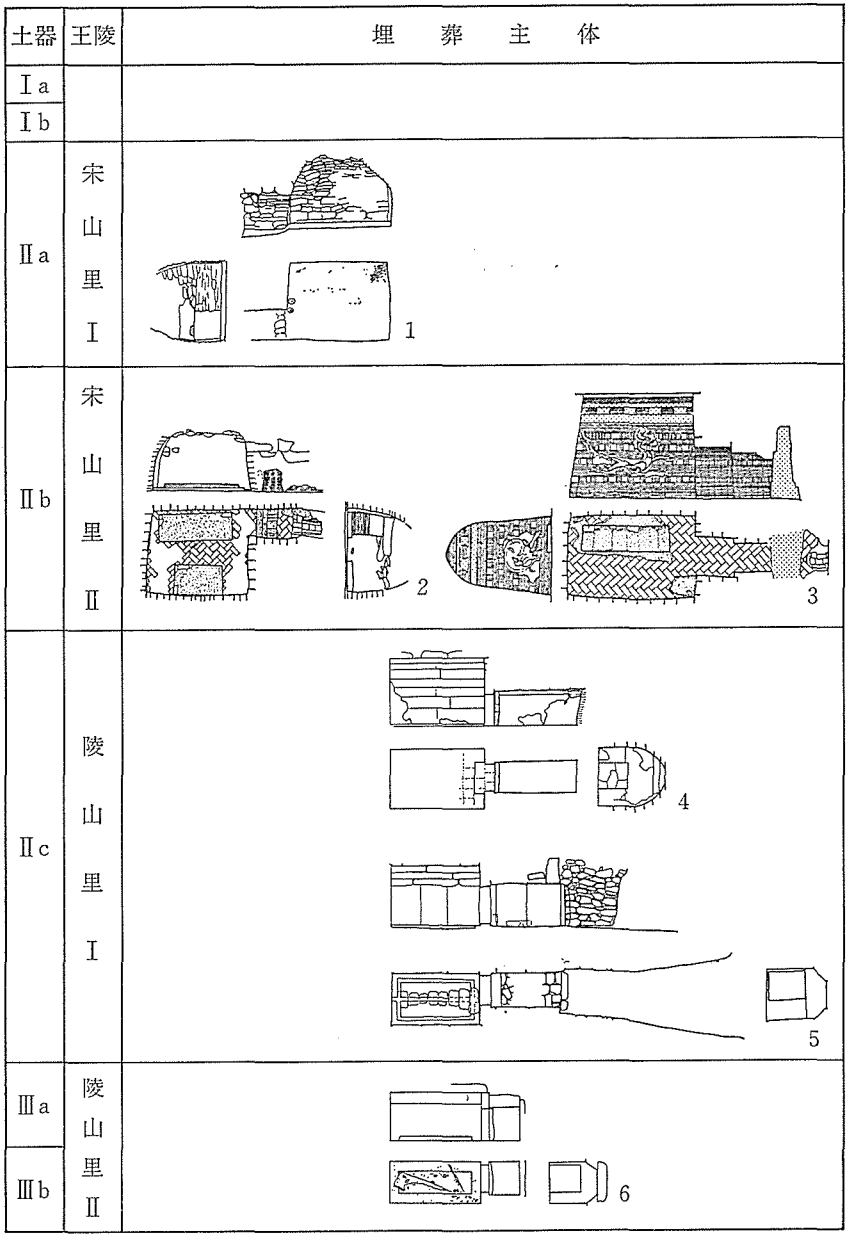

図6　百済王陵の埋葬主体の編年と土器編年との関係（縮尺250分の1）
1宋山里1号墳　2宋山里29号墳　3宋山里6号墳　4中下塚　5陵山里東4号墳　6中上塚

穹窿状天井石室よりも玄室幅が約三分の二程度となり、この段階で被葬者が二人から一人へ移行し始めた可能性がある。

陵山里Ⅱ段階　この段階になると、王陵は基本的に平斜天井石室となる。つまり、東上塚(6)、中上塚、西上塚、西下塚、陵山里七号墳、陵山里東一・二・三・五号墳をこの段階のものとする。前段階との相違点としては、羨道が一〇〇㎝前後からそれ以下になり、玄室幅も東上塚以外は一四〇㎝以下となることを指摘できる。陵山里東四号墳で現われた板石による二重閉塞はこの段階に定着する。東上塚は棺台が二つあって二人埋葬を意図して造られているが、他のものは、玄室幅などからみて、単葬用であった可能性が高いと考える。

3　年代の推察

以上錦江下流域の古墳に副葬された土器、および熊津時代以後の王陵の埋葬主体の編年案を提示した。次に、これらの実年代を推察していくこととする。

最初に、土器の編年と王陵の埋葬主体の編年との並行関係を考える。まず錦江Ⅱa段階の標式とした熊浦里二〇号墳の埋葬主体は穹窿状天井石室である。また、錦江Ⅱb段階には存在する球形胴の瓶が、穹窿状天井石室である宋山里一号墳、玉龍洞古墳[31]から、錦江Ⅱa～c段階にみられる球形胴の短頸壺が、穹窿状天井石室である宋山里五号墳や、宋山里四号墳の手前に造られた宋山里八号墳から出土している。以上から、宋山里Ⅰ・Ⅱ段階と錦江Ⅱ段階がほぼ並行すると思われる。

一方、錦江Ⅲb段階の六谷里一九七三年調査古墳や六谷里二号墳の埋葬主体は平斜天井石室であり、錦江Ⅲa段階の九龍里古墳も平斜天井石室、あるいはその影響を受けた石室であると思われる。王陵以外に平斜天井石室が出現するのは、石室の定型化する陵山里Ⅱ段階以降と思われ、現状で平斜天井石室に共伴する土器は錦江Ⅲa段階を上限とすることから、陵山里Ⅱ段階は錦江Ⅲa段階以降に並行すると考えられる。以上の検討から、錦江Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc段階を、それぞれ宋山里Ⅰ・Ⅱ・陵山里Ⅰ段階に並行させ、錦江Ⅲ段階は陵山里Ⅱ段階に並行すると考える。

次に、実年代を考えたい。まず、錦江Ⅰ段階は、広口長頸壺Ⅰ類に類する土器が忠清北道清州市新鳳洞古墳群[31]から多く見つかっている。報告者は四世紀中葉から五世紀初めの年代を考えているが、木心鉄板張輪鐙が多く共伴することからその年代の中心は五世紀代とみなすべきであろう。また、後述のように、錦江Ⅰ段階の埋葬主体は竪穴式石室であるが、伽耶地域での竪穴式石室の本格的出現が五世紀以降であることから[32]、錦江Ⅰ段階はおおむね五世紀内に納まるものと考える。

錦江Ⅱ・Ⅲ段階では、まず王陵の埋葬主体、特に塼室の築造年代が手がかりとなる。武寧王陵は、出土墓誌から武寧王の没年が五二三年、埋葬が五二五年であることがわかり[33]、また閉塞に使われた塼の中に「士壬辰（五一二）年作」銘をもつものがあり[34]、宋山里六号墳の閉塞に使われた塼の中には「梁□□為師矣」銘がある[35]。これらからみて、塼室の築造時期が六世紀前半に納まることはまず間違いない。そして、宋山里古墳群の築造が熊津遷都以後であることが認められるなら、宋山里Ⅰ段階は五世紀後葉にあてられる。陵山里Ⅰ・Ⅱ段階は明確な年代推定の根拠を欠くが、平斜天井石室の確立以前の過渡期とみなした陵山里Ⅰ段階を六世紀中葉とすれば、平斜天井石室が定型化する陵山里Ⅱ段階は六世紀後葉から百済が滅亡する七世紀中葉にあてられよう。土器では、胴部最大径が上半にある短頸壺が、扶余郡扶余邑双北里[36]で隋の五銖銭を、同双北里北浦[37]や扶余郡窺岩面新里[38]で開元通宝を伴出した例から、錦江Ⅲ段階の年代の一部が六世紀後葉～七世紀前葉にあたると考えられる。また、佐賀県野田遺跡でTK二〇八型式ないしTK二三型式並行と考えられる三足杯が出土しており[39]、同様の形態の三足杯は現状では錦江下流域では未発見であるが、底部の深さから考えれば、錦江Ⅱa段階、ないしはそれ以前に当て得るものと考える。以上の二例はいずれも王陵の埋葬主体との相対関係、及び実年代観と矛盾しない。

以上から、錦江Ⅰ段階は五世紀代で熊津遷都以前、錦江Ⅱ段階（宋山里Ⅰ・Ⅱ段階・陵山里Ⅲ段階）を五世紀後葉から六世紀中葉、錦江Ⅲ段階（陵山里Ⅱ段階）を六世紀後葉から七世紀中葉というおおまかな年代を当てておきたい。

① 藤沢一夫「百済の土器・陶器」（『世界陶磁器全集』第一三巻、一九五五年）。

② 安承周「百済土器의研究」（『百済文化』第一二輯、一九七九年）、同「土器」（『韓国史論』一五、一九八五年）。

③ 尹武炳第一章注⑪前掲文献。
④ 全栄来「土器「(直口無頸壺)의形態変遷과編年」(『南原草村里古墳群発掘調査報告書』(『全北遺跡調査報告』第一二輯)一九八一年、同「高敞雲谷里百済窯址発掘報告」(『高敞雅山地区支石墓発掘報告書』、一九八四年。翻訳として尹煥訳「韓国高敞雲谷里百済窯址発掘報告」(『古文化談叢』第一五集、一九八五年)、同「益山新龍里百済土器窯址(緒方泉訳)」(『古文化談叢』第一九輯、一九八八年)、同「百済地域の陶質土器窯跡」(『陶質土器の国際交流』、一九八九年)。
⑤ 小田富士雄「百済の土器」(『世界陶磁全集』一七、一九七九年)。
⑥ 尹武炳第一章注⑪前掲文献三五頁など。
⑦ 全栄来注④一九八一前掲文献など。
⑧ 尹武炳「連山新興里百済古墳과그出土遺物」(『百済文化』第七・八合輯、一九七五年)。
⑨ 表井里古墳群一九八五年調査区の一四号墳の略称。以下、表井里古墳群の古墳や夢村土城の遺構の引用には同様の略称を用いる。
⑩ 安承周・李南奭第一章⑮前掲文献。
⑪ 採集例としては、忠南大学校博物館蔵品(忠南大学校博物館図録(以下、『忠南大図録』と略記)』一九八三年、二一六・二一七番)があげられる。
⑫ 夢村土城八五―一〇号貯蔵穴、同八七―二号住居址Ⅲ層、同八七―一号住居址Ⅳ層小型貯蔵穴、同八八―方形遺構など。
⑬ 夢村土城八七―一号住居址Ⅳ層小型貯蔵穴、同八七―三号住居址、同八八―一号住居址出土例など。
⑭ 徐聖煕・申光燮第一章注⑮前掲文献。
⑮ 金三龍・金善基第一章注⑰前掲文献。
⑯ 徐聖煕「百済器台의研究」(『百済文化』第一一輯、一九八〇年)。
⑰ 尹武炳第一章注⑪前掲文献。
⑱ 全栄来注④一九八八年前掲文献。
⑲ 夢村土城八五―一号土壙墓、同八五―三・一〇号貯蔵穴、同八七―二号住居址Ⅲ・Ⅳ層、同八八―一・二・四・六号貯蔵穴出土例など。
⑳ 尹武炳第一章注⑪前掲文献図一二―1など。
㉑ 安承周「保寧郡九龍里古墳과出土遺物」(『百済文化』第一〇輯、一九七七年)。
㉒ 金永培「公州中壮里施釉土器壺出土百済石室古墳」(考古美術』一二九・一三〇、一九七六年)。
㉓ 全栄来注④一九八四年前掲文献。
㉔ 姜仁求第一章注⑯前掲文献。
㉕ 安承周・李南奭第一章注⑱前掲文献。
㉖ 池健吉「保寧長峴里百済古墳과出土遺物」(『百済文化』第一一輯、一九七八年)。
㉗ 姜仁求第一章注⑤前掲文献、東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡』2百済・伽耶篇九八～一〇二頁、一三〇～一三二頁。
㉘ 文化財管理局第一章注⑫前掲文献一三頁。
㉙ 梅原末治第一章注④前掲文献七五頁、姜仁求第一章注⑤前掲文献八六頁、有光教一第一章注⑭前掲文献四九五～四九七頁。
㉚ 金永培「公州邑玉龍洞古墳出土의遺物」(『考古美術』二三、一九六二年)。
㉛ 李隆助・車勇杰『清州新鳳洞百済古墳群発掘調査報告書』一九八三年。
㉜ 申敬澈「Ⅳ考察」(『金海礼安里古墳群』Ⅰ、一九八五年)。
㉝ 文化財管理局第一章注⑫前掲文献一三頁。
㉞ 金永培「百済武寧王陵塼考」(『百済研究』第五輯、一九七四年)。
㉟ 関野貞「塼より見たる百済と支那南北朝特に梁との文化関係」(『寶雲』第一〇冊、一九三四年)、軽部慈恩『百済美術』一九四六年、大

坂金太郎「百済壁画塼室墳出の在銘塼について」（『朝鮮学報』第五一輯、一九六九年）。

㊱ 斎藤忠「扶余発見の壺の一型式」（『考古学雑誌』第三二巻第一号、一九四二年）。

㊲ 姜仁求「上錦里・双北里의火葬墳墓」（『百済古墳研究』一九七七年）。

㊳ 姜仁求「新里・軍守里의火葬墳墓」（『百済古墳研究』一九七七年）。

㊴ 蒲原宏行・多々良友博・藤井伸幸「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」（『古文化談叢』第一五集、一九八五年）。

三　錦江下流域の三国時代墓制の変遷

前章で検討した副葬土器と百済王陵の埋葬主体の編年をもとに、錦江下流域の古墳の墓制の様相をみると、大まかに、錦江Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ段階の土器がそれぞれ古墳の副葬品として使用された時期（以下これらを錦江Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期と呼ぶ）ごとに、大きく変化するように思われる。そこで、各時期ごとに、埋葬主体と土器をはじめとする副葬品のあり方、さらに古墳の分布状況などを通して、墓制の様相とその変遷を検討してみたい。

1　錦江Ⅰ期の墓制

錦江下流域で錦江Ⅰ期の古墳と確実に認められるのは、現状としては連山地域の新興里一・二号墳と、表井里古墳群一九八五年調査区の諸古墳である。それらの埋葬主体は、いずれも竪穴式石室である。[1] 側壁は塊石積みで、短壁は全高の半分をこえる大きさの板石を立て、その上に塊石を数段積み、天井は五～一〇枚程度の板石で閉塞する。床面は、地山をそのまま利用するものと、中央に礫を並べて屍床を造るものがある。その構造や規模からみて、基本的に、成人が一人伸展葬されたと考えられる。

これらの古墳は、いずれも現状では墳丘は認められず、表井里一九八五年調査区でみると、埋葬主体間の距離は八m前後で、埋葬主体がそれぞれ大きな墳丘をもっていたとは考えにくい。また、伽耶地域でみられるように、埋葬主体が数基ずつまとまって群をなすこともなく、集団墓のような散漫な分布状況を示す。

出土遺物には、広口長頸壺・高杯形器台・把手付鉢などの土器類の他に、鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄槍・鉄斧・素環轡・紡錘車などが知られる。遺物の残存状況が良好な例からみて、副葬品は、主として短壁寄りの空間に納められたと推測される。また、これまで釘・鋲・鐶座金具などは発見されておらず、被葬者の埋葬にあたっては、釘・鋲などを用いない組み合せ式の木棺を使ったか、木棺は使われなかったものと思われる。

こうした、錦江Ⅰ期の連山地域にみられる墓制のもつ諸要素のうち、高杯形器台は、他の百済地域ではみられず、把手付鉢も、忠清北道清州周辺に存在する[2]他は百済地域ではみられない。むしろそれらは、尹武炳氏が指摘したように[3]、新羅・伽耶系のものと認められる。また、竪穴式石室を埋葬主体とし、高杯形器台とその上にのせる壺の組み合せが基本的な副葬土器の構成要素となる点は、同時期の伽耶地域の墓制に通ずるものである。しかし、その一方、高杯形器台の形態自体は、全く同様のものを新羅・伽耶地域で見いだすことはできず、その全形や透孔の形において、独自性を有するものである[4]。そして、高杯形器台の上にのせられる広口長頸壺はやや形態に違いがあるものの、漢江下流域の夢村土城や、清州新鳳洞古墳群に類例が求められる。また、副葬土器の中に高杯がほとんど欠如する一方、三足杯C類のような、漢江下流域に類例を求められる器種の共伴が認められる場合がある。

こうしてみると、錦江Ⅰ期における連山地域の墓制は、新羅・伽耶的要素と百済的要素を合わせもち、全体としては他の地域にはみられない、独自の墓制をなしているといえる。こうした墓制が出現した背景には、連山地域が、当時百済の中央勢力の根拠地であった漢江下流域からはなれ伽耶地域に接した、いわば百済と伽耶の境域に位置する、という地理的条件があったと考えられよう。そして、高杯形器台などの表採例に、公州や扶余の出土を伝えるものがある[5]ことから、同様の墓制が、錦江Ⅰ期に錦江下流域の他の地域にも広がっていた可能性がある。ただ、これまでの調査例では、埋葬主体や墳丘の規模、あるいは副葬品の内容において卓越する、首長層の墓と思われる古墳は見つかっておらず、この墓制を有した地域共同体内の階層分化の状況を、墓制の上からうかがうことは今のところできない。

2　錦江Ⅱ期の墓制（図8）

錦江Ⅱ期には、新しい埋葬主体として横穴式石室や塼室が出現し、副葬土器も変化して、墓制の様相は前段階とは大きく変わることとなる。副葬土器などからみて、この時期では、塼室、穹窿状天井石室・持送り平天井石室などの横穴式石室、そして竪穴式石室、竪穴系横口式石室が、主たる埋葬主体として使われたと考えられる。

穹窿状天井石室は、先述のように宋山里古墳群で主に採用されている(2)が、それ以外では王都の所在した公州地域でも数少なく、分布も熊津洞古墳群や玉龍洞古墳、金鶴洞古墳⑥、甫通洞古墳⑦など、宋山里古墳群の周辺に限られる。そして、錦江下流域のそのほかの地域では、益山地域の熊浦里二〇号墳、笠店里一号墳(7)しか知られていないのが現状である。これらの石室の玄室の平面規模を比較すると、宋山里古墳群のものはその他の古墳にくらべて玄室の長さ・幅とも大きいことが知られる（図7）。また、断片的な出土遺物から推測すると、宋山里古墳群の被葬者は、帯金具・耳飾などの金・銀・金銅製装身具を身につけており、副葬された武器・武具・馬具の一部にも、金・銀・金銅が使われている。そして、出土遺物の中に金銅張・銀張の方頭・円頭・花形頭棺飾り釘や、鉄製・銀製の鐶座金具があり、武寧王陵でみられるような装飾性の高い木棺が使われたことが知られる。これに対し、宋山里古墳群以外では、金・銀・金銅製品の発見例が少ない。また、金銅張・銀張の飾り釘は笠店里一号墳を除き発見されていない。このように、穹窿状天井石室を採用した古墳でも、宋山里古墳群のものとそれ以外では、石室の規模や副葬品の内容などに差異を見いだすことができる。こうした点からみても、宋山里古墳群の被葬者が百済王ないし王族であったことは認めてよいであろう。ところが、益山地域の笠店里一号墳は、金銅製冠帽・沓・耳飾やガラス玉などの装身具、鉄地銀張楕円形鏡板付轡・鉄地銀張結紐形杏葉・木心鉄板張輪鐙・鉄製輪鐙・金銅製鞍金具などの馬具、胡籙金具（勾玉形飾金具）、百済土器（広口壺・短頸小壺など）、青磁四耳壺など多様な副葬品をもち、伴出した棺釘の中には銀張方頭の飾り釘があって、王陵に匹敵する内容を有している。

塼室は、武寧王陵・宋山里六号墳以外では、校村里二・三号墳⑧が知られるのみで、塼を一部利用したものを含めても、

宋山里古墳群とその周辺に限られ、その使用が非常に限られたものであることが推察される。

持送り平天井石室は、玄室平面が長方形で袖部を石積みで形成し、特に短壁を大きく内側に持ち送って平らな天井石をのせるものである。基本的に片袖式であるが、笠店里（羅浦里）七号墳（8）のような両袖式のものも存在し、羨道は塊石を積んで閉塞される。公州地域では公州邑の南側に分布が認められるとされ⑨、扶余地域⑩・連山地域⑪・益山地域⑫でそれぞれ類例が知られる。副葬品としては、土器や棺釘・鐶座金具以外には、金銅製耳環・勾玉・銀製鉸具などの存在が断片的に知られるのみである。被葬者数については、表井里七九―一三号墳（5）では、棺台が二次にわたって造られ、鐶座金具が四個一セットで二セット分原位置で発見されたことから、二人の被葬者が石室の主軸に並行方向に、鐶座金具付の木棺に納められて相次いで埋葬された状況がわかる。他の例でも、同様な埋葬がなされたものと推測される。ところが、表井里八一―六号墳は、玄室幅二五〇cm、同長四四〇cmと規模的には百済地域の石室の中では最大級だが、玄室中央に長さ二二四cm、幅一一七cm、高さ五〇cmの棺台が造られ、一人の埋葬を意図したとみられる点で特異である。

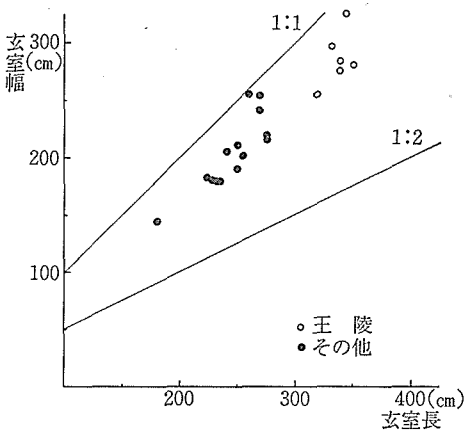

図7　穹窿状天井石室の玄室長・玄室幅

竪穴式石室や竪穴系横口式石室を埋葬主体とする古墳は、公州地域⑬と連山地域⑭で類例が知られ、その数は横穴式石室を埋葬主体とする古墳にくらべてはるかに多い。構造的には、側壁だけではなく短壁も塊石積みにする点が、錦江Ⅰ段階の連山地域でみられた竪穴式石室と異なり、竪穴系横口式石室ではその一方が被葬者埋葬の際の入口になる。床面には礫を敷き、両端に副葬品を埋納する空間をもつものもある。副葬品の内容は、盗掘のため本来のセットを推測させるものに欠

けるが、土器類のほかには、刀子・鉄鏃・紡錘車・鉄斧・鉄鎌程度と一般に貧弱である。しかし、宋山里一・四号墳の前面にそれぞれ位置する宋山里七・八号墳(4)からは、金製耳飾、銀製釧、各種ガラス玉、銀製装飾品がみつかっている。また、棺釘が出土する例があることから、木棺を使用した埋葬が想定される。被葬者数については、竪穴系横口式石室の場合、その構造上追葬は不可能ではないが、木棺が使用されたことを認めるならば、規模的に木棺を複数埋葬することは難しい。また、表井里八一―一号墳(6)のように、幅が一〇〇cmを超えるものでも、石室中央に棺台を一つだけ造っており、竪穴式石室や竪穴系横口式石室の被葬者は、基本的に一人であったと考えられよう。

以上のように、錦江Ⅱ期には種々の埋葬主体が存在する。しかし、新たに現われた副葬土器の構成や、釘・鐶座金具を用いた木棺の使用など、他の墓制の基本的な要素は埋葬主体の差をこえて共通する。そして、それらの種々の要素の多くは、この時期に新たに現われ、その起源を漢江下流域に求め得るものであることを指摘できる。まず、この時期に新たに現われた横穴式石室は、漢江下流域から高句麗ないし楽浪にその系譜をたどり得るものである。そして、横穴式石室の伝播は同時に、一石室内に二人の被葬者(恐らくその多くは夫婦)を埋葬する、という風習も伝えている。また、埋葬主体にかかわらずこの時期にみられるようになる、釘で組み立てられた木棺の使用は、高句麗の横穴式石室や、漢江下流域の土壙墓・石槨墓に類例を求められるものである。

さらに、この時期から新たに古墳の副葬に使われる土器の多くも、最近の調査の進展により、その源流を漢江下流域に求めることが可能となってきた。まず、三足杯については、熊津遷都後に杯に足をつけることで新たに生み出された器種であるという理解があった。[15] しかし、最近の夢村土城の発掘調査の進展により、五世紀代の漢江下流域にすでに三足杯が存在し、逆に杯は主体的には存在しないことが判明してきた。また、短頸壺・有蓋高杯・筒形器台なども、漢江下流域の夢村土城や石村洞古墳群出土土器に同様のものが見いだされる。ここで、短頸壺の系譜が石村洞古墳群にみられる肩部に格子文帯をもつ短頸壺に、さらには中国青磁四耳壺にたどれることや、[16] 漢江下流域にみられる三足盤が青銅製ないし青磁

製の三足盤の模倣と考えられるように[17]、三足杯の成立に中国の三足器の伝統が関係すると考えるならば、先にあげた諸器種の出現した地域は、錦江下流域よりも、中国との文化的関係が想定される四・五世紀代の漢江下流域とするほうが妥当である。ただ、三足杯・有蓋高杯・筒形器台は、漢江下流域では生活遺構から主に出土することや、錦江Ⅰa段階に三足杯C類の類例があることから、これらの器種が錦江Ⅱ期になって錦江下流域で本格的に出現するのか、それ以前の段階ですでに錦江下流域の生活の場などで使用されていて、錦江Ⅱ期に古墳の副葬品として使われるようになったかが、問題となる。しかし、少なくとも、短頸壺については、漢江下流域で四世紀代から副葬に用いられる主要器種の一つであり、錦江Ⅱ期における副葬用土器の器種の変化においても、漢江下流域の伝統のなんらかの影響を考えることは可能であろう。

一方、錦江Ⅱ期の墓制には、錦江Ⅰ期の伝統を引く在地的な要素、あるいは漢江下流域以外から影響を受けたと思われる要素も見いだされる。その主要なものは、竪穴式石室や竪穴系横口式石室である。竪穴式石室は、錦江Ⅰ期で連山地方に存在し、漢江下流域では類例が乏しく[18]、前段階からの在地的な埋葬主体と認められよう。また、竪穴系横口式石室は、伽耶地域にその系譜を求め得るものである[19]。次に、土器では、漢江下流域で主体的な存在がみられない杯B類は、錦江下流域において伝統的な器種であった可能性がある[20]。また、連山地域においては、錦江Ⅱa段階まで広口長頸壺や高杯形器台が使われていたことも指摘できる。ただ、以上のような在地的な要素は、錦江Ⅱ期の墓制の中で主体的な位置を占めるのではなく、全体の墓制の中で断片的に見いだされるだけである。前段階に明らかに独自の墓制が存在していた連山地域では、錦江Ⅱa期に造墓の中心があると考えられる表井里古墳群一九八一年調査区で、広口長頸壺や高杯形器台が使われていることや、埋葬主体は竪穴系横口式石室が多く、持送り平天井石室である六号墳も、玄室中央に棺台を設置して、単葬を志向しているなど、在地的な要素が比較的多く見いだされる。しかし、続く錦江Ⅱb期以降に造墓がなされる表井里古墳群一九七九年調査区では、竪穴系横口式石室の存在以外には、在地的な要素が見いだされなくなる。こうした状況は、錦江Ⅱ期に現われた新たな墓制が、前段階から存在した墓制を解体・変容させていった過程を暗示していると考える。

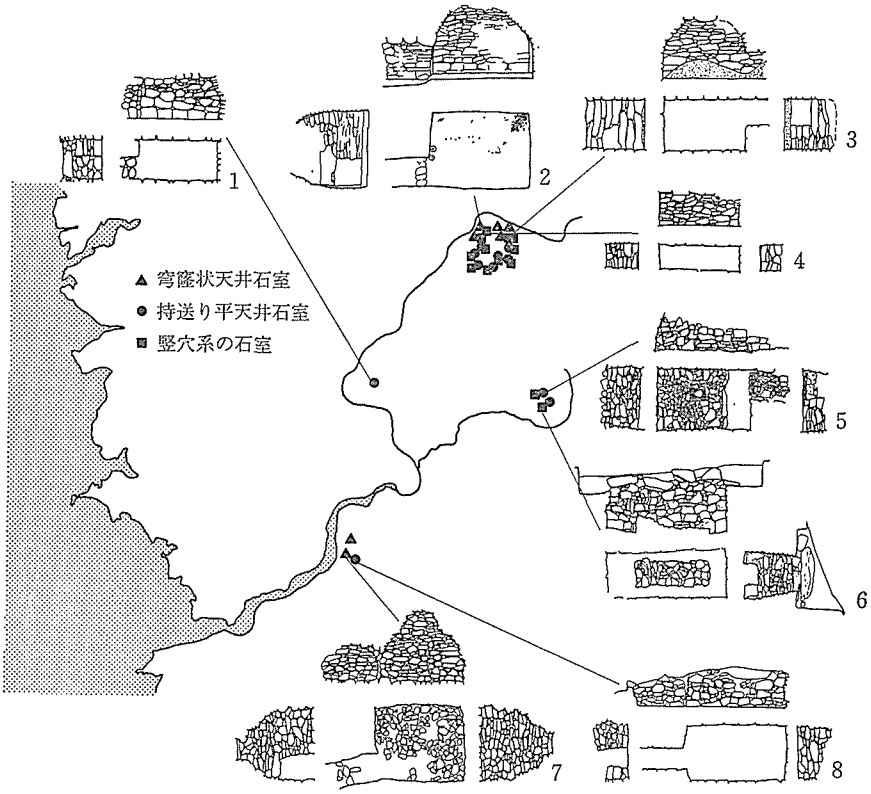

図８　錦江Ⅱ期の古墳の埋葬主体とその分布（埋葬主体の縮尺 250 分の１）
１　陵山里割石塚　２　宋山里１号墳　３　牛禁里１号墳　４　宋山里８号墳
５　表井里79―13号墳　６　表井里 81―1 号墳　７　笠店里１号墳　８　笠店里７号墳

また、各種の埋葬主体や、それらの古墳群内の構成は、同様に存在するのではなく、階層差や地域差を持ちつつ現われることが指摘できる。まず、埋葬主体についてみれば、その数や副葬品の内容などから考えて、横穴式石室が竪穴式石室や竪穴系横口式石室より上の階層に位置づけられると考えられる。竪穴式石室を埋葬主体とする古墳の中には、宋山里七・八号墳のように、比較的多くの副葬品をもつ例もあるが、その場合でも、位置関係からみて、宋山里一・四号墳の陪葬的な役割を果たしていたと考えられ、その被葬者の社会的な立場も、従属的なものであったことは容易に想像される。また、横穴式石室の中でも、持送り平天井石室よりも、穹窿状天井石室が階層的

に上であり、さらにその中でも王陵クラスのものは、玄室規模や副葬品の内容などにおいて卓越している。中国南朝からの技術の導入により造られたものと思われる塼室も、王陵クラスの埋葬主体としてのみ使われている。このように、埋葬主体は、大型の穹窿状天井石室（または塼室）―穹窿状天井石室―持送り平天井石室―竪穴式石室・竪穴系横口式石室という序列が想定できる。

次に、こうした各種の埋葬主体の古墳群内の組み合せをみてみると、（a）穹窿状天井石室を主体とするものと、（b）持送り平天井石室と竪穴式石室・竪穴系横口式石室を主体とするものに大別できる。a類の古墳群は、公州地域においては、宋山里古墳群や熊津洞古墳群のように、公州市街の北側に分布する。また、益山地域では、笠店里古墳群や熊浦里古墳群で調査された錦江Ⅱ期に属する古墳の大部分は横穴式石室であり、先述の笠店里一号墳のような豊富な副葬品をもつ穹窿状天井石室も存在しており、a類にあてられる。一方、b類の古墳群は、公州市街の南側に分布することが知られる。また、連山地域では、表井里一九七九年調査区・一九八一年調査区ともb類にあてられる。これら2つのタイプの古墳群は、a類―b類、という序列が想定でき、それは、軽部慈恩氏が指摘したように[21]、古墳群を造営する集団の階層差を反映していると考えられる。また、地域的な広がりをみれば、王都であった公州地域では両類が共存し、益山地域でもa類が存在するのに対して、連山地域ではb類のみである。今後連山地域でもa類が発見される可能性があるものの、こうした分布差からは、各地域ごとの造墓集団間の階層差の存在も想定されよう。

以上の様相を整理すると、錦江Ⅱ期の墓制は、埋葬主体は多様であるが、副葬土器など他の墓制の要素は基本的に共通し、それらは基本的に漢江下流域に起源を求められる。在地的な要素も部分的に見いだされるが、それらは断片的で、墓制全体の中では主体的な役割を果たしていない。そして、埋葬主体やそれらの古墳群内における構成から階層差の存在が想定され、それは地域内とともに、各地域間、あるいは地域ごとの造墓集団の間に見いだせる可能性がある。

3　錦江Ⅲ期の墓制（図10）

五三八年に百済の王都は扶余に遷都し、王陵の墓域も陵山里古墳群に移動する。その直後の陵山里Ⅰ段階は、前章でも述べたように、塼室の模倣から始まって平斜天井石室が確立するまでの過渡期といえる。その過程で、王陵ではトンネル天井石室と平天井石室が新たな石室型式として現われる。トンネル天井石室は、扶余地域の遞馬里大塚[22]などに粗い切石造りのものが、また、公州地域の梧谷里古墳[23]や扶余地域の亭岩里二〇号墳[24]に塊石積みの類例が知られるが、伴出遺物が良好な例を欠くため、王陵との正確な並行関係や性格は明らかではない。また平天井石室は、後述の通り、類例の多くはむしろ次の段階に見いだされる。

それらに対し、錦江下流域の墓制の変遷において、大きな画期となったと思われるのが、陵山里Ⅱ段階（＝錦江Ⅲ期）の王陵における平斜天井石室の定型化と、同石室の普及である。扶余地域では、陵山里古墳群をはじめとして、錦江両岸の現在の扶余郡内に数多くの例が知られるほか[25]、公州地域[26]、益山地域[27]、連山地域[28]でも、その存在が報告されている。これらの石室の玄室長と幅を検討してみると、東潮氏が指摘したように[29]、陵山里古墳群・陵山里東古墳群の石室が、他のものにくらべて規模が大きいことがわかる（図9）。また、規模からみて、益山大王墓（7）・小王墓も、王陵級の古墳として考えることができる。

ここで、平斜天井石室の構築法をみてみると、陵山里古墳群にみられるような全体を切石ないし板石で構築するもの（a類）のほかに、側壁部を板石、斜天井部を割石で構築するもの（b類、5）、全体を塊石で構築するもの（c類、6）が存在する。a類には、王陵にみられるような精巧な造りのものがある一方、石面の加工が粗い例や、斜天井部が十分に斜めにならなかったり、側壁部と斜天井部の境の目地が通らない例[30]がある。b類は、側壁部と斜天井部の境の目地が通らないものが大部分であり、斜天井部も、割石で構築するために乱雑である。さらにc類では、塊石で構築するため、側壁部と斜天井部の境が不明確であるものが多く、奥壁も、塊石で構築するものには若干の持送りがみられるものがあり、天井形

態のみからみれば、持送り平天井石室との区別に苦しむものもある。しかし、a類と同様に両袖部に門柱石を立てて、時に框石も備える板石閉塞に対応した玄門構造をもつこと、そして持送り平天井石室にくらべて、大振りの石材を使う傾向にある点などにおいて、a類の平斜天井石室の影響を受けたことが考えられ、平斜天井石室の範疇に含めることができる。平斜天井石室には、構築法の差異をこえて王陵の形態を模倣しようとする志向性が想定でき、その一方、切石の加工技術が一般に普及し得ない高度な技術であったと想定できるならば、王陵にみられる構築法との共通性の有無によって、a類—b類—c類、という序列の存在が認められるであろう。

こうした同系統の石室内の構築法の差は、平天井石室の場合でも認められる。つまり、六谷里六号墳のように、切石造りないし板石造りのものがある一方、六谷里九号墳のように門柱石を立てた玄門構造をもつ塊石造りのものも存在する。これらの石室の祖形としては、東下塚がまず考えられるが、天井形態から平天井石室とされるものの中には、平斜天井石室の斜天井部が退化したと考えられるものがあり、[31] その系統は今後検討されるべきものである。

このほか、連山地域では、副葬土器からみて、錦江Ⅲ期でも竪穴系横口式石室が埋葬主体として採用された可能性があり、[32] 六谷里五号墳のような、塊石積み無袖の小石室も存在する。また、公州地域の独特の石室型式として知られる斜天井石室は、[33] 玄門の構造や、切石造りである点から考えれば、やはり同時期の築造と考えるべきであろう。

この時期の古墳の副葬品は、土器類・耳環・銀製冠飾のほか若干の鉄器類が知られる程度で、全体に薄葬傾向に向かうようである。ただ、そうした中で、王陵クラスの墓には、中上塚・益山大王墓でみられるような、漆塗で飾釘を使用した

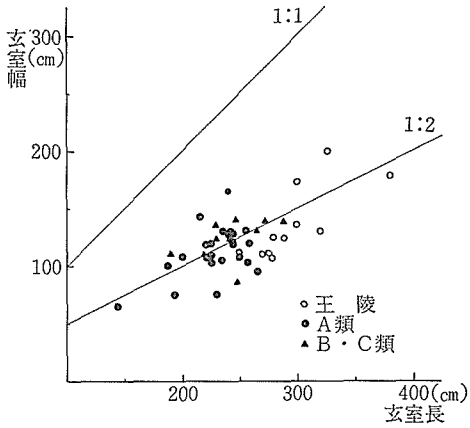

図9　平斜天井石室の玄室長・玄室幅

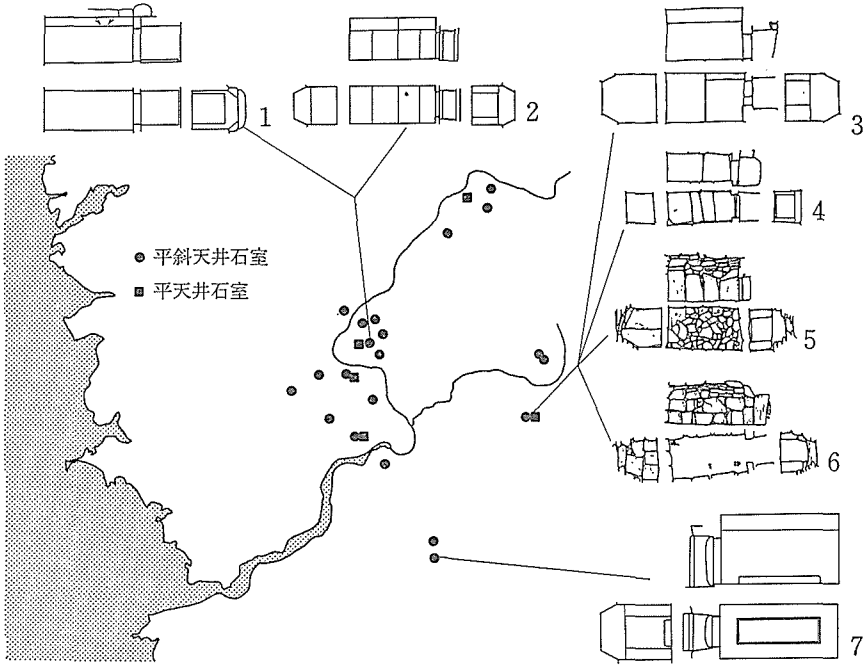

図10　錦江Ⅲ期の古墳の埋葬主体とその分布（埋葬主体の縮尺250分の1）
1　西下塚　2　陵山里7号墳　3　六谷里7号墳　4　六谷里6号墳
5　六谷里12号墳　6　六谷里1号墳　7　益山大王墓

木棺が使用されたようであり、その他の古墳との差異が認められる。また、横穴式石室は、時期が下がるにつれて玄室の規模や羨道長が縮小する傾向にあり、玄室幅一〇五㎝で二人の埋葬が認められる六谷里六号墳のような例もあるものの、この時期に基本的に複葬から単葬へ変化したものと思われる。

古墳の分布についてみると、連山地域の六谷里古墳群のあり方が興味深い。ここでは、一九八六年の調査により、平斜天井石室七基、平天井石室二基、型式不明の石室四基の、横穴式ないし横口式石室が調査された。それらは低丘陵上に二～三基ずつ小群をなして分布している。それらは、（1）非常に精美な切石造りの石室が主体を占め、銅心金張耳環や銀製冠飾が出土した小群（六・七・九号墳）、（2）切石造りの石室と板石・割石混合、あるいは塊石造りの石室とが共存する小群（二・八号墳や、一〇・一一・一二号墳）、（3）塊石積みの石室のみでなってい

る小群（一・四・五号墳）に大別できる。（1）類型の類例としては、陵山里古墳群、豆谷里古墳群、亭岩里古墳群の四九～五〇号墳の小群などがある。また、（2）類型の類例としては、亭岩里古墳群の四四～四六号墳の小群をあげることができる。これら各小群は古墳を継起的に造営した小集団に対応するのであろう。とすれば、各小群の類型の差、つまり平斜天井石室のa～c類のいずれをどの程度採用できたかは、古墳群を形成した地域共同体内の各小群の造墓集団間の格差を反映したものと考えられる。こうした状況を復元していくならば、平斜天井石室ないし平天井石室という王陵と共通した構造の埋葬主体をもつ古墳が基本的に広く採用されつつ、それらの中では、古墳群ないしその中の小群ごとに、石室の構築法の差異による格差がつけられていた、ということとなる。まだ実体は明らかではないが、竪穴系横口式石室などの埋葬主体は、階層的にはさらにその下に位置づけられるだろう。

① 扶余郡草村面素沙里では、四基の土壙墓が発見されているが、土器からみて、本稿でいう錦江I期以前の四世紀代にさかのぼるものと思われる。その意義づけについては今後の資料増加に待ちたい。安承周・朴秉国「百済古墳文化の研究―扶余・草村面素沙里百済土壙墓を中心に―」（『百済文化』第五輯、一九七一年。翻訳として、武末純一訳「百済古墳文化の研究―扶余・草村面素沙里百済土壙墓を中心に―」（『朝鮮考古学年報』vol. 2、一九七五年））。

② 清州新鳳洞古墳群や、忠清南道天原郡城南面花城里からの出土例が知られる。李隆助・車勇杰第二章注㉛前掲文献、小田富士雄「越州窯青磁を伴出した忠南の百済土器―4世紀の百済土器・その二」（『古文化談叢』第一二集、一九八三年）。

③ 尹武炳第一章注⑪前掲文献二九～三一頁。

④ 尹武炳氏は円形透孔を百済的な要素として指摘している。尹武炳第一章注⑪前掲文献四一頁。

⑤ 国立扶余博物館蔵品の高杯形器台の中に、伝扶余地方出土品（百済文化開発研究院『百済土器図録』（以下『土器図録』と略称）八七番）、公州郡灘川面光明里出土品（『土器図録』八八番）がある。また、公州郡長岐面鳳安里から脚付壺の出土例が知られる。安承周「公州鳳安里出土百済土器」（『百済文化』第九輯、一九七六年）。

⑥ 安承周第一章注⑥一九六八年前掲文献。

⑦ 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」（五）（『考古学雑誌』第二四巻第六号、一九三四年）。

⑧ 斎藤忠「昭和一四年度に於ける朝鮮古蹟調査の概要」（『考古学雑誌』第三〇巻第一号、一九四〇年）、軽部慈恩「百済古墳築造の地理的条件とその構築順序」（『日本大学三島教養部研究年報』第一輯、一九五二年）、同『百済遺跡の研究』一九七一年。

⑨ 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」（三）（『考古学雑誌』第二四巻第三号、一九三四年）三三頁。

⑩ 陵山里割石塚が知られる。

⑪ 表井里七九―一三号墳・同八一―六号墳が知られる。

⑫ 笠店里五～八号墳があげられる。また、熊浦里二号墳は石室床面の半分が失われているが、おそらく穹窿状天井石室か持送り平天井石室になると思われる。

⑬ 軽部慈恩氏が第一章注⑫前掲文献で分布状況をまとめている。

⑭ 表井里一九七九年調査区・一九八一年調査区のほとんどの埋葬主体が竪穴系横口式石室とされる。前者は錦江Ⅱb段階以降、後者は錦江Ⅱa段階を中心とするものと考えられる。

⑮ 尹武炳第一章注⑪前掲文献三二頁。

⑯ 全栄来第二章注④一九八一年前掲文献、金元龍・李熙濬「서울石村洞3号墳의年代」（『斗渓李丙燾博士九旬紀念韓国史学論叢』一九八七年）二二～二三頁、定森秀夫「韓国ソウル地域出土三国時代土器について」（『生産と流通の考古学（横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ）』一九八九年）、四五四頁。

⑰ 定森秀夫注⑯前掲文献四四七～四四九頁、朴淳燮「토기에대한고찰」（『夢村土城東南地区発掘調査報告』一九八八年）一九七～一九八頁。

⑱ 石村洞古墳群では、石槨墓と報告されているものがあるが、それらは槨の周囲に多量の石を裏込め風に配するものであったり、出土土器からみて六世紀中葉以降に下がるものが大部分である。

⑲ 東潮「新羅・於宿知述干壁画墳に関する一考察」（『岡崎敬先生退官記念論集東アジアの考古と歴史』上、一九八七年）五〇二頁。

⑳ 五世紀中葉ごろの漢江下流域の土器と錦江Ⅱ段階の土器の器種構成を比較すると、先述の通り杯B類は漢江下流域には主体的に存在しないが、杯A類も漢江下流域では類例がない。ところが、受け部の形態からみて、杯A類は杯B類から派生したとは考えにくく、むしろ杯部の形態のみでは三足杯A類と共通性が高い。また、錦江Ⅱ期以降の三足杯の蓋は天井部と口縁部の境に稜線をもつ杯蓋につまみがついたものが多いが、同様の蓋は漢江下流域ではみられない。三足杯の本来の分布の中心が漢江下流域にあり、かつ錦江下流域は本来杯類の分布域であったという仮定が許されるならば、こうした状況は、杯A類は、錦江下流域に持ち込まれた三足杯A類の製作技術で杯を製作した結果、稜線をもつ三足杯の蓋は、従来の杯蓋につまみをつけた結果出現した、と説明することが可能である。

㉑ 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」（八）『考古学雑誌』第二六巻第四号、一九三六年）二四頁。

㉒ 朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第三冊、一九一六年七五六～七六〇番。

㉓ 安承周・全栄来第一章注⑤前掲文献、一二〇頁。

㉔ 洪斌基・徐聲煎「扶余亭岩里古墳群」（『中島』Ⅱ（『国立博物館古蹟調査報告』第一三冊）、一九八一年）。

㉕ 陵山里古墳群の他には、豆谷里古墳群（徐聲煎「豆谷里百済廃古墳」（『考古学』第五・六合輯、一九七九年）、亭岩里古墳群（洪斌基・徐聲煎注㉔前掲文献）、太陽里古墳（李康承・申光燮「扶余太陽里百済古墳一例」）『百済文化』第一五輯、一九八三年）の報告があるほか、姜仁求第一章注⑤前掲文献に多くの測量図が掲載されている。

㉖ 九岩里古墳（安承周第一章注⑤一九七五年前掲文献一二～一三頁）

㉗ 甫通洞四号墳、陵峙古墳（軽部慈恩第一章注⑫前掲文献）がある。益山大王墓・小王墓のほか、城南里古墳群・龍頭里古墳群でその存在が知られる（崔完奎「古墳・陶窯址」（『益山郡文化財地表調査報告書』一九八六年）。

㉘ 表井里一九六九年調査墳、同七九―一二号墳、六谷里一九七三年調査墳、同一～三・七・一〇～一二号墳があげられる。

㉙ 東潮・田中俊明第二章注㉗前掲文献、一三六頁。

㉚ 例えば亭岩里四九号墳など。

㉛ 例えば豆谷里一〇号墳は、奥壁が方形をなして平天井石室に分類されるべきだが、側壁の構築法は平斜天井石室a類そのものである。先

述のように、平斜天井石室には斜天井部が曖昧なものがあり、そこから豆谷里一〇号墳のような形態を経て、例えば六谷里六号墳のような小規模の平天井石室へ変化した可能性もあるのではなかろうか。

㉜ 例えば表井里一九七九―七号墳。

㉝ 柿木洞一・二号墳、校村里六号墳があげられる。

四　錦江下流域の三国時代墓制の変遷が意味するもの

前章において、三期に分けて錦江下流域の三国時代墓制の変遷を検討した。こうした変遷は、錦江下流域の三国時代史を考えていく上で、どのような意味をもつものと評価できるだろうか。以下検討してみることとしよう。

まず、錦江Ⅰ期には、竪穴式石室を埋葬主体とし、広口長頸壺・高杯形器台・把手付鉢などを主体とした土器が副葬される墓制が連山地域で認められ、それは、新羅・伽耶的要素と百済的要素を合わせ持ちながら、全体としては、他の地域にはみられない独自の墓制であると評価できた。同時代、百済の中心地であった漢江下流域では、積石塚、のちには横穴式石室を埋葬主体とする古墳が中心をしめる墓制が展開していたと思われるが、その分布は漢江下流域を大きくこえるものではなかったようである。[1] 一方、全羅南道の栄山江流域では、甕・瓶・長頸壺などを主体とした土器を副葬し墳丘内に大型甕棺を複数埋葬する墓制が、全羅北道東側の南原・任実地域では、慶尚南道高霊地域の墓制によく似た伽耶的な墓制が展開していた。[2] このように、この時期、百済地域においては、独自の墓制が、地理的に区分される小地域を単位としていくつか認められ、[3] 在地の地域共同体がそうした墓制をそれぞれ有していたものと考えられる。[4] そして、漢江下流域の墓制が他の墓制より卓越していた様子がうかがえないことや、後の墓制のあり方と比較したとき、この時期では、百済中央勢力の政治的な影響力が百済地域の各地にある程度広まっていたとしても、少なくともそれは各地域共同体の有する独自の墓制のあり方を強く規制するほどのものではなかったものと判断される。

ただ、連山地域の場合、副葬土器の一部の器種に共通性がみられることなどから、少なくとも漢江下流域とのなんらか

の文化的接触があったことは確かである。また、各地域の墓制のうち、栄山江流域や南原・任実地域では、漢江下流域と同様に、大型の墳丘・埋葬主体や豊富な副葬品を持つ首長墓と認定できる古墳が存在するのに対し、連山地域では、そうした古墳が現状では見つかっていない。漢城陥落に伴う遷都の地として錦江下流域が選ばれることを考えると、この時期にすでに百済中央勢力が、他の地域にくらべて錦江下流域にかなりの影響力をもっていたことは十分有り得ることで、それが連山地域の地域共同体が首長墳を造ることを阻害する要因となった、という解釈も現状では可能である。ただし、今後この地域で首長墓級の古墳の発見される可能性は残っており、その可否は調査の進展を待つこととしたい。

錦江Ⅱ期になると、埋葬主体・副葬土器など多くの面において、墓制の様相は大きく変わる。その要素の多くが、漢江下流域に起源を求め得ることや、年代的な関係から考えて、墓制の変化の原因が、百済の熊津遷都にあることはまず間違いない。また、埋葬主体やその古墳群内での構成により、いくつかの階層が想定されることは先述した。埋葬主体のうち、最上層に属する大型の穹窿状天井石室や塼室は、遷都に伴い熊津にやってきた百済中央勢力の頂点に立つ王や王族の墓に使われたと思われる。一方、最下層に属する竪穴式石室・竪穴系横口式石室は、その伝統からすれば、在地の人々が採用したと考えられよう。また、先述の二種類の古墳群の類型のうち、基本的に、a類の古墳群の造墓集団は熊津遷都とともに移ってきた百済中央勢力、b類の古墳群の造墓集団は在地の地域共同体の有力者、といった想定が可能である。墓制の中に在地的要素が断片的に残存することなどを考えに入れるならば、錦江Ⅱ期の墓制の様相は、基本的には在地の地域共同体を、漢江下流域から移動してきた百済中央勢力がその支配下に組み込んだ状況を象徴的に表わしていると考えられる。[5]

ここで、錦江Ⅱ期の墓制の動向を考える上で重要なのは、持送り平天井石室のあり方である。横穴式石室の中でも、穹窿状天井石室を埋葬主体とする古墳が、数・分布とも限られるのに対して、持送り平天井石室は公州地域の他に、扶余地域・連山地域・益山地域にそれぞれみられる。埋葬主体の系統では百済中央勢力に属するものであるが、それらが在地系の竪穴式石室・竪穴系横口式石室を主とするb類の古墳群の中で中心的な位置を占めている場合、表井里八一―六号墳の

ように、副葬土器や棺台のあり方などから、在地的な変容をみせるものがあることも考えれば、その被葬者は、むしろ在地勢力の有力者と考えた方が自然である。百済中央勢力は、彼らを掌握することで各地域共同体を支配し、そのかわりに、彼らは横穴式石室を採用し得たのではなかろうか。持送り平天井石室は、六世紀を前後する時期には、錦江下流域ばかりではなく、全羅北道井邑郡永元面隠仙里古墳群[6]、同南原郡二白面草村里古墳群[7]、全羅南道長城郡長城邑鈴泉里古墳[8]、同海南郡月松里造山古墳[9]など、全羅道各地にも出現する。これらの古墳は、石室の基本的な構造や、杯・短頸壺・瓶などの副葬、鐶座金具付きの木棺の使用などから、基本的に百済中央勢力と同様の墓制全体を受容したことがわかる。また、この段階を境に、栄山江流域の大型甕棺墓制のような在地の墓制は、姿を消し始めたり変質していくことが指摘される。しかしその一方で、石室の細かな構造や副葬土器の構成において、在地的なものと考え得る要素が認められることから[10]、その被葬者は百済中央勢力から派遣された人と考えるよりは、やはり各地域の地域共同体の有力者であったと考えたほうがよい。こうした持送り平天井石室をはじめとする新しい墓制の出現は、百済中央勢力の各地域共同体への本格的支配の開始に対応するものと考えられよう。

ただ、持送り平天井石室と一括したものの、各地域の石室形態にはかなりの差異点もみられる。また、王都以外の地域の中にも、豊富な副葬品を持つ穹窿状天井石室の笠店里一号墳をはじめとする古墳群がある益山地域のような場合がある。こうした地域ごとの墓制の様相の差異から考えれば、この時期の百済中央勢力と各地域共同体との関係は必ずしも一様ではなく、百済中央勢力の地方支配は、この時期では必ずしも画一的ではなかったものと思われる。

こうした百済中央勢力の墓制の浸透は、錦江Ⅲ期になり、平斜天井石室が出現・普及することで、一つの頂点を迎えたと思われる。その数からみれば、おそらくは錦江Ⅱ期で持送り平天井石室を採用していた階層程度までは、平斜天井石室を埋葬主体として採用し得たのであろう。また、錦江下流域をこえたこの石室の分布は、全羅南道西南端の長山島にまで広がっている[11]。平斜天井石室の中でも、王陵とそれ以外の古墳との差は石室の規模などに表われ、さらに石室の構造によ

る序列の存在も先に想定した。ただ、錦江Ⅱ期では王陵に採用された穹窿状天井石室の他の古墳での使用が限定されていたのに比べ、この段階では、王陵と同系の石室が支配階層に広く普及したようであり、その裏には百済中央勢力が支配階層を画一的に把握している状況がうかがわれる。地方の平斜天井石室の被葬者については、扶余遷都以後確立したといわれる五方制と関連させて、地方行政責任者として派遣された貴族層、とする推定がすでになされている。[12] 被葬者については、中央から派遣された人ばかりではなく、その一部は在地の首長層の系譜を引く人々である可能性もあると考えるが、いずれにせよこの段階での平斜天井石室の広範な採用は、百済の国内の支配体制の整備された状況を象徴的に表わしているものと考えたい。

以上のように、錦江下流域における墓制変遷は、在地の地域共同体にすれば、独自の墓制の喪失の過程であり、百済中央勢力にすれば、自らが持つ墓制の拡散の過程とみなせる。そうした動向はその他の地域共同体と百済中央勢力の間にも認められるのであり、そこに百済中央勢力による地方支配のあり方の変化を読みとることができるだろう。高句麗の攻撃により漢江下流域を失った百済中央勢力は、熊津遷都後、その目を南方、そして東方の伽耶地域に目を向け、国内の官僚制や地方支配体制を整備していったことは、文献の研究で知られてきたことであるが、以上みたような墓制の動向は、こうした歴史的状況を反映したものと考えられるのである。

① 石村洞古墳群以外に、現状で漢江以南で、確実な基壇式積石塚が確認された例はない。近年宋山里古墳群で基壇状積石遺構が発見された（尹根一第一章注⑫前掲文献）が、主体部が存在せず、報告者の述べるように、「假墓、虚墓」のような、埋葬の実体のともなわないものと思われる。また、無基壇式積石塚の存在は、漢江上流域を中心に知られるが、それも現状では錦江下流域までは広がりが確認されていない。横穴式石室では、清州新鳳洞古墳群の石室墳が、錦江Ⅱ期並行期以前に築造された可能性を残すが、伴出遺物がほとんどなく、年代決定は現状では難しい。

② 全栄来「任実金城里石槨墓群」（『全北遺跡調査報告』三、一九七四年）、同『南原月山里古墳群発掘調査報告』一九八三年、尹徳香・郭長根『斗洛里発掘調査報告書（『全北大学校博物館学術叢書』二）』一九八九年。

③ この他、清州新鳳洞古墳群は、一基の石室墳を除き、全て土壙墓を埋葬主体とし、副葬品に武器・馬具類が多い、という特徴がある。また、副葬土器類も、大型の把手付鉢をはじめとする固有の器種が存在

するようであり、資料の増加によっては、独自の墓制の広がりを清州周辺に設定できる可能性がある。また、全羅北道井邑郡永元面雲鶴里古墳群（全栄来「井邑雲鶴里古墳群」（『全北遺跡調査報告』第三輯、一九七四年）は、墳丘内に竪穴式石室を設けるもので、調査者である全栄来氏は、その墓制の地域性に注意されている。

④　文献研究により熊津遷都以後の百済支配勢力への新進地方勢力の進出の様相を検討した盧重国氏は、百済地域の墓制の地域性の存在を、有力な地方勢力の存在を裏付ける証拠としてあげている。盧重国「百済王室의 南遷과 支配勢力의 変遷」（『韓国史論』四、一九七八年）一二〇～一二四頁、同『百済政治史研究』、一九八八年。

⑤　ここで興味深いのは、この段階の錦江下流域でみられるような、出自の違いによって異なる埋葬主体が共存し、かつ両者の間に階層差が想定できる状況は、熊津遷都以前の漢江下流域でも存在したと考えられることである。林永珍氏によれば、漢江下流域では、百済の中央勢力の墓制である積石塚系墓制と、土着の馬韓系の住民の墓制である土壙墓系墓制が階層的な関係を持って共存し、熊津遷都後も後者の墓制は存続するという（林永珍「石村洞一帯積石塚系와土壙墓系墓制의 性格」（『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢』Ⅰ考古学篇、一九八七年）。林氏の見通しが正しいとすれば、熊津遷都による墓制の変化は、百済中央勢力の墓制が漢江下流域から錦江下流域に移動し、土壙墓系墓制のかわりに、竪穴式石室を埋葬主体とする在地の墓制を組み込んだ、というように説明できよう。つまり、墓制から推測すれば、王都における百済中央勢力は、遷都により支配の対象が変わっても、基本的に在地勢力を階層的に組み込むことで、その基盤を形成していたと考えられるのである。

⑥　全栄来「古阜隠仙里古墳群」（『全北遺跡調査報告』第二輯、一九七三年）。

⑦　全栄来『南原草村里古墳群発掘調査報告書（『全北遺跡調査報告』第一二輯）』一九八一年。

⑧　李栄文「長城鈴泉里古墳」（『郷土文化遺跡調査』第二輯、一九八四年）、同「長城鈴泉里石室墳発掘調査略報告」（『郷土文化』第九輯、一九八八年）。

⑨　徐聲燁・成洛俊『海南月松里造山古墳（『光州博物館学術叢書』第四輯）』一九八四年。

⑩　南原草村里古墳群では、m二一号墳のように、錦江下流域の持送り平天井石室と類似した形態の石室がある一方、m四三号墳やm六〇号墳のように、玄室高が低く、竪穴式石室に羨道をつけたような様相を示す石室が存在する。また、全羅南道の鈴泉里古墳・月松里古墳には杯が副葬されるが三足杯は副葬されず、その一方で月松里古墳では、栄山江流域の大型甕棺墓で副葬に用いられていた瓶が副葬されている。

⑪　金元龍・任孝宰「道昌里横穴式石室古墳」（『南海島嶼考古学（『東亜文化研究叢書』一）』一九六八年。

⑫　全栄来「鳳東屯山里百済式石室墳」（『全北遺跡調査報告』第三輯、一九七四年、翻訳としては新谷武夫訳「韓国全羅北道鳳東屯山里百済式石室墳」（『古文化談叢』第七集、一九八〇年）、崔夢龍『羅州大安里5号百済石室墳発掘調査報告』一九七八年、一四～一五頁、徐聲燁・成洛俊『羅州郡潘南面古墳群総合調査報告書』（『光州博物館学術叢書』第一三冊、一九八八年）前掲文献一七七～一八〇頁、など。

五　おわりに

以上、本稿では、土器や王陵の埋葬主体で時間軸を設定した上で、錦江下流域の三国時代の墓制の変遷を、三期に分けて検討した。そして、特に、竪穴式石室を埋葬主体とし、広口長頸壺・高杯形器台などを副葬する錦江Ⅰ期の墓制を、この地域独自の墓制と評価し、そうした墓制を有した地域共同体を想定することで、熊津遷都に伴う錦江Ⅱ期の墓制の変化を、在地の勢力が百済中央勢力に階層的に組み込まれ、再編された結果の反映であると考えた。そして、錦江Ⅲ期の平斜天井石室の普及は、百済中央勢力の地方の画一的な支配の強化を反映するものと考えた。

従来、京畿道・忠清道・全羅道といういわゆる百済地域の墓制研究は、横穴式石室に代表される百済中央勢力の墓制を追うことに主眼がおかれていたように思われる。しかし、最近その様相が明らかにされてきた栄山江流域の大型甕棺墓制や、今回検討した錦江Ⅰ期の墓制のような、在地的な墓制が認識され始めた現状においては、今後それらの墓制の動向をも、注目し検討していく必要があるだろう。そして、資料の増加を待ちつつ、在地的な墓制とその背後に想定できる地域共同体の動向と、百済の中央勢力の動向との対比を、小地域ごと、さらには古墳群レベルですすめることによって、文献資料に乏しいこの地域の三国時代史を、より立体的に復元していくことが可能となると考える。

また、今回の検討に関して問題となるのは、他地域における百済系の横穴式石室の出現の様相と、その背景である。最近の伽耶地域の調査によれば、六世紀の前葉には伽耶地域に横穴式石室が出現するようであり、その契機には、やはり百済の熊津遷都が想定されるところである。また、日本の横穴式石室の源流としても、百済の横穴式石室が候補にあげられるのは周知の通りである。しかし、それらの出現をより具体的に説明するためには、錦江下流域あるいは百済地域内における墓制の変遷とは異なる説明が用意されねばならないだろう。そうした差異は、横穴式石室の導入にともなう在地の墓制の変容のあり方によって評価できる、という見通しをもっているが、その具体的な検討は今後の課題として、ひとま

ず本稿を終えることとしたい。

挿図出典

図二　1・2—安承周・李南奭『論山表井里百済古墳発掘調査報告書—一九八五年度発掘調査—』、一九八八年、3～7—尹武炳「連山地方百済土器의研究」(『百済研究』第一〇輯、一九七九年)。

図三　1～7—安承周・李南奭『論山表井里百済古墳発掘調査報告書—一九八五年度発掘調査—』、一九八八年。

図四　1・2・4～6・8・9—徐聲燾・申光燮「表井里百済廃古墳調査」(『中島』V(『国立博物館古蹟調査報告』第一六冊)一九八四年)、3・7—金三龍・金善基『益山熊浦里百済古墳群発掘調査報告書』、一九八八年、10～17—筆者実測。

図五　1～6—尹武炳「連山地方百済土器의研究」(『百済研究』第一〇輯、一九七九年)、7～13—小田富士雄「百済土器窯調査の成果—全北雲谷里窯址の調査に寄せて—」(『古文化談叢』第一二集、一九八三年)、14・15・20・21—安承周・李南奭『連山六谷里百済古墳発掘調査報告書—一九八六年度発掘調査—』、一九八八年、16・17・19—尹武炳「連山地方百済土器의研究」(『百済研究』第一〇輯、一九七九年)、18—池健吉「保寧長峴里百済古墳斗出土遺物」(『百済文化』第一一輯、一九七八年)。

図六　1—野守健・神田惣蔵『忠清南道公州宋山里古墳調査報告』(『昭和二年度古蹟調査報告』第二冊、一九三五年)、2・3—軽部慈恩『百済美術』一九四六年、4—有光教一「扶余陵山里伝百済王陵・益山双陵」(『橿原考古学研究所論集』第四、一九七九年)、5—梅原末治「扶余陵山里東古墳群の調査」(『昭和一二年度古蹟調査報告』、一九二〇年)、6—朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第三冊、一九一六年。

図八　1—朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第三冊、一九一六年、2—野守健・神田惣蔵『忠清南道公州宋山里古墳調査報告』(『昭和二年度古蹟調査報告』第二冊、一九三五年)、3・4—軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」(一)～(八)(『考古学雑誌』第二三巻第七号～第二六巻第四号、一九三三～一九三六年)、5—尹武炳「連山地方百済土器의研究」(『百済研究』第一〇輯、一九七九年)、6—徐聲燾・申光燮「表井里百済廃古墳調査」(『中島』V(『国立博物館古蹟調査報告』第一六冊)一九八四年)、7・8—文化財研究所『益山笠店里古墳発掘調査報告書』、一九八九年。

図十　1—朝鮮総督府『朝鮮古蹟図譜』第三冊、一九一六年、2—姜仁求『百済古墳研究』一九七七年、3～6—安承周・李南奭『論山六谷里百済古墳発掘調査報告書—一九八六年度発掘調査—』、一九八八年、7—有光教一「扶余陵山里伝百済王陵・益山双陵」(『橿原考古学研究所論集』第四、一九七九年)。

謝辞　本稿は一九九〇年一月に京都大学文学部に提出した修士論文の一部をもとに改稿したものである。修士論文執筆時より小野山節先生からは、種々の御指導をいただいている。資料調査にあたっては、全栄来・金成亀・崔鍾圭・徐五善・崔玉煥・全斗錫・林永珍・朴淳發・崔鍾鐸・蒲原宏行の諸先生・諸氏に、たいへんお世話になった。成稿にあたっては、京都朝鮮古代研究会の小原哲・高正龍・定森秀夫・田中俊明・中村潤子・松井忠春・宮川禎一・門田誠一、そして西谷正・東潮・亀田修一の諸先生・諸氏から種々の御教示をいただいた。また、高橋克壽氏をはじめとする京都大学文学部考古学研究室の諸兄には、常々、多くの御教示をいただいている。末筆ながら記して感謝の意を表わします。

追記　本稿作成中に曺永鉉「三国時代横穴式石室墳의系譜와編年研究―漢江以南地域을中心으로」（忠南大学校大学院碩士学位論文、一九九〇年）の存在を定森秀夫氏から教えられた。漢江以南地域の横穴式石室を集成・分類し、石室の各構造部位の変遷を細かに検討して、横穴式石室の系譜と変遷を検討された労作であり、教えられた点も多かったが、時間の都合上、本稿では言及することができなかった。石室の年代観等には相違点もあり、それらの検討は将来稿を改めて行なうこととしたい。

（京都大学大学院生）

Tombs of the Three Kingdoms Period in the Kum Basin, Korea

by

YOSHII Hideo

Through the examination of the changes in tombs, this article seeks to clarify historical change in the Kum basin, the location of the capital of Paekche during the 6th and 7th century. First, I analyze changes in the gray stonewares buried in tombs, and the tombs of the Paekche kings. Then I examine changes within the tombs, dividing them into three stages. In the Kumgang I stage (5th century), there are pit-style stone chamber tombs where wide-mouthed and long-necked jars and jar stands are largely buried. These practices have characteristics both of Paekche and of Kaya, and are recognized as the peculiar burial customs of this region. In the Kumgang II stage (from the end of the 5th to the middle of the 6th century), a new type of tomb appeared, marked by corridor-style stone chamber tombs and containing bowls and tripod bowls. This style originated in the tombs of the Han basin. However, some elements from the Kumgang I stage—pit-style stone chambers and some similar types of pottery—are also found in tombs of the lower classes. In the Kumgang III stage (from the end of the 6th to the middle of the 7th century), the new type of corridor-style stone chamber tomb —characterized by flat and oblique ceiling chambers—which originated in the tombs of Paekche kings, diffused over the Kum basin.

I conclude that the changes in burial customs from the Kumgang I stage to the Kumgang II stage reflect the beginning of the domination by the governing group of Paekche over the people living in the Kum basin. In particular, this reflects their move from the Han basin to the Kum basin around 475. Moreover, the diffusion of the new type of corridor-style stone chamber tombs at Kumgang III stage indicates the intensification of the local domination by the ruling group of Paekche. The same changes in tomb styles can also be seen in other regions of Cholla province.